HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	世親『法華論』訳注 (1)
Author(s)	藤井, 教公
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 105, 21-112
Issue Date	2001-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34001
Type	departmental bulletin paper
File Information	105_PR21-112.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

世親『法華論』訳注(1)

藤井教公・池邊宏昭ほか

一、はじめに

『法華論』は、世親（天親 Vasubandhu）が著したと伝える『法華経』の注釈書で、具名を『妙法蓮華経憂波提舎』（菩提留支訳）あるいは『妙法蓮華経論優波提舎』（勒那摩提訳）という。本論はサンスクリットテキスト、チベット訳テキストのいずれも存せず、ただ漢訳二種が残るのみである。今日インド撰述にかかる唯一の法華注釈書となっているが、内容は文々句々に解釈を施したものではなく、序品における七成就、方便品における五示現、譬喩品における七喩などの独自の視点から経の大綱を簡略に示したものとなっている。

本論の漢訳は、六世紀初めに北朝に来支した菩提留支と勒那摩提の二人のインド人訳経僧によって別々になされたようである。そのために今日二種の漢訳が残っているわけだが、両テキストの間に内容的な相違は見られず、字句

の相違や、語句の省略などの差に止まっている。両本を比べると、概して勒那摩提訳の方が語句の上ですっきりと整理されている印象を与えている。

本論訳出後の伝播の状況は余り明らかではない。本論の引用が見られるようになるのは、隋の天台智顗（538-597）の後期時代の著作とされる『法華玄義』や、湼頂（561-632）が智顗の法華経講説をまとめ、智顗没後に完成した『法華文句』においてである。『法華玄義』も湼頂の再三にわたる修治の手が入っていることからすると、『法華論』の引用に関しては智顗の与り知らぬところで湼頂によって取り込まれたという可能性もある。(1)

本論を多く引用、援用したのは三論の吉蔵（549-623）である。吉蔵は『法華玄論』『法華義疏』『法華統略』など、大部な法華注釈書を著しているが、それらの中に本論を引用するばかりでなく、本論に対する注釈書である『法華論疏』三巻を著している。(2) この注釈書は菩提留支訳に拠っているが、吉蔵のほか、この論書を引用したり、注釈書を製する場合でも、ほとんどが菩提留支訳に依拠している点は、本論の伝播を考える上で興味深い事実を提供している。

天台では上述の如く湼頂が修治した智顗の著作に引用が見られ、その後の天台教団の中でも重視されていたようであるが、むしろ本論は最澄以来の日本叡山天台において重んじられており、最澄は自身で本論の科文を製している。また、円珍（814-891）は入唐して天台山で天台章疏を学び『法華論記』十巻を著している。

本論はまた中国法相宗においても重視され、慈恩大師基（632-862）は『法華玄賛』において引用・援用している。

以上、本論の伝播、講究について少しく触れたが、近現代においてテキスト自体に対する基礎研究はこれまでのところそう多くはない。近年の本書に対する研究成果では、清水梁山師の国訳ならびに訳注があるくらいであるが、(3) この国訳の不備な点は、底本として菩提留支訳テキストに拠りながら、同テキストの難読部分については何の断りもな

くその部分だけ勒那摩提訳を採用している点である。このような恣意的なテキストの用い方がされているので注意が必要である。この国訳以後、本論の研究成果としてカルフォルニア大学から刊行されたテリー・ラエ師のディサテーションがあり[4]、これに本論の英訳と訳注とがある。しかしながら、我が国では清水梁山師以後、本論に対する厳密な国訳と訳注は未だなされておらず、現代語訳ももちろんなされていない[5]。

筆者藤井は、平成八年度に北海道大学文学研究科大学院演習「法華論研究」を一年間に亘って開講し、大学院生諸君とともに『法華論』を最初から演習形式で講読した。本稿は、その時に院生諸君が用意した書き下し、現代語訳、訳注について授業で検討を加え、訂正加筆し、書き下し文のスタイル、現代語訳における訳語、註の形式などに最小限の統一を取ったものである。演習に参加し、原稿作成に関わった院生諸君は次の通りである。

池邊宏昭　石井泰紀　市川純造　小沢憲雄　桂　紹寿　狐野利文　武田和博　千野政寿　都築千尋　中村覚道　永江雅邦　林寺正俊　矢田　哲　山口　昇

このうち、当初から原稿のとりまとめの労を取ってくれたのは、現在は博士課程を単位取得して退学した武田和博君であり、また池邊宏昭君も途中二年間のインド留学を挟みながらも本稿がこのような形にまとまるまでの加筆補正、体裁の統一の労を惜しまなかった。したがって、本稿に幾分の功ありとすればそれは上記の原稿作成に携わった諸君の賜であり、瑕瑾ありとすればそれは私、藤井の過である。ここに大方の批正を請う次第である。

（1）天台智顗と『法華論』の関わりについては、拙論「天台智顗の『法華経』解釈――如来蔵仏性思想の立場から――」勝呂信静編『法華経の思想と展開』（平楽寺書店）二〇〇一年、および奥野光賢「天台教学と『法華論』――吉蔵との比較において――」（『天台大師研

究』所収、一九九七年）などの論攷がある。

（2）吉蔵の『法華論』の援用に関しては、奥野光賢「吉蔵の『法華論』の依用について――七処に仏性有りの文をめぐって――」（『仏教学』第21号、一九八七年）、「吉蔵教学と『法華論』」（平井俊栄監修『三論教学の研究』所収、春秋社、一九九〇年）、「吉蔵の授記思想――末光愛正氏の批判に応えて――」（『駒澤短期大学仏教論集』第一号、一九九五年）などの一連の論攷がある。また同氏には日本天台までを含む『法華経論』の依用について、「円珍の『法華論』解釈をめぐって」（『印度学仏教学研究』第四十一巻第一号、一九九二年）の論攷がある。さらに智顗と吉蔵の『法華論』解釈について、『法華論』が挙げる十七の異名部分を円珍の『法華義記』に基づいて対照した論文に、河村孝照「吉蔵の法華論疏について」（『印度学仏教学研究』第四十五巻第二号、一九九七年）があって、唐代中国仏教とそれを移入した日本仏教における『法華論』受容の様相を知ることができる。

（3）清水梁山「國譯妙法蓮華経優波提舎」『國譯大藏經』論部二十、一九二一年。

（4）Terry Rae Abbot: Vasubandhu's Commentary to the "Saddharmapundarika-sutra" A Study of its history and significance, University of California, Berkley, 1985.

（5）『法華論』の内容解説についての論攷には次のようなものがある。

丸山孝雄「法華経論の立場」『講座・大乗仏教4　法華思想』春秋社、一九八三年。河村孝照「『法華論』解題」立正大学法華経文化研究所『法華文化研究』第25号、立正大学法華経文化研究所、一九九九年。

二、凡例

一、本稿は、『大正新脩大藏経』巻二十六所収の菩提留支訳テキストを依用する。尚、テキストの提示は、『大正蔵』に準じたが、旧字体は新字体に改め、適宜、句点や中黒点を補った。また、テキストの見出し部分に付した頁数などの表記は、『大正蔵』の該当個所を示す。「勒」とは勒那摩提訳である。

例、【テキスト】(p. 1a, *l.* 1)（勒 p. 10c, *l.* 1）

一、本稿は、『法華論』上下二巻のうち、上巻所収の『法華経』序品の部分について、書き下し、現代語訳、訳注を付したものである。

一、書き下し文は現代仮名遣いにより、新字体を用いた。

一、テキスト部には、勒那摩提訳との語句の相違を注記し、書き下し文中には、内容的な注記を付けた。

一、注番号は当該語の最後に付けた。

例、転不退転法輪[1]。

[1] 勒那摩提訳には、「転」の字を欠く。

経の如く[2]「婆伽婆は王舎城の耆闍崛山中に住したまいし」が故なり。

[2] 『妙法華』「仏住王舎城耆闍崛山中」（『大正蔵』第九巻、一頁下、一九行目）と対応する。

一、経文・法華論のテキストの引用には鍵括弧「　」を付け、語句を補うときは角括弧［　］を、意味の補足・語句の言い換え等は丸括弧（　）を用いた。

例、経の如く「婆伽婆は王舎城の耆闍崛山中に住したまいし」が故なり。

『［法華］経』において「尊師は、王舎城の耆闍崛山の中にとどまられ」とあるように。

第八地以上の無功用智は、下（第六地以下）と上（第七地）と異なっているからである。

一、『法華経』からの引用と思われる箇所については、梵本（南條・ケルン本）の文句との対応を検討し、注記した。

『妙法蓮華経憂波提舎』科段分け[1]

帰敬偈

法華経本文引用

分段

一　序分成就

二　衆成就　（分段）

衆成就　一　数成就

衆成就　二　行成就

衆成就　三　摂功徳成就　（分段）

摂功徳成就　一　（声聞功徳成就）

声聞功徳成就　一　上上起門

声聞功徳成就　二　総別相門

声聞功徳成就　三　摂取事門

摂功徳成就　二　（菩薩功徳成就）

菩薩功徳成就　一　上支下支門

菩薩功徳成就　二　摂取事門　一

菩薩功徳成就　三　摂取事門　二

摂功徳成就　三　（補足）

衆成就　四　威儀如法住成就

三　如来欲説法時至成就
四　依所説法威儀隨順住成就
五　依止説因成就
六　大衆欲聞法現前成就
七　文珠師利答成就
総説
成就十事　（分段）
成就十事　一　現見大義因成就
成就十事　二　現見世間名字章句意甚深因成就
成就十事　三　現見希有因成就
成就十事　四　現見勝妙因成就
成就十事　五　現見受用大因成就
成就十事　六　現見摂取一切諸仏転法輪因成就
成就十事　七　現見善堅実如来法輪因成就
成就十事　八　現見能進入因成就
成就十事　九　現見臆念因成就
成就十事　十　現見自身所経事因成就

1　この科段分けは諸注釈に基づき独自に作成したものである。

序　帰敬偈

【テキスト】(p. 1a, *l*. 1)（勒 p. 10c, *l*. 1）

妙法蓮華経憂波提舎巻上
大乗論師婆藪槃豆釈
後魏北天竺三蔵菩提留支
共沙門曇林等　訳

頂礼正覚海　浄法無為僧
為深利智者　開示毘伽典
祇虔牟尼尊　及菩薩声聞
令法自他利　略出勒伽弁
帰命過未世　現在仏菩薩
弘慈降神力　願施我無畏
大悲止四魔　護菩提増長[1]

【書き下し文】

妙法蓮華経憂婆提舎、巻の上
大乗論師婆数槃豆、釈す。
後魏北天竺三蔵菩提留支、
沙門曇林等と共に訳す。

正覚の海と浄法と無為僧とに頂礼し、深き利智者の為に毘伽典[2]を開示す。
祇(まさ)に牟尼尊と及び菩薩・声聞とを虔(うやま)いて、法をして自他を利せしめ、略して勒伽弁[3]を出す。
過未世と現在との仏・菩薩に帰命す。
弘慈もて神力を降し、願わくば我に無畏を施し、大悲もて四魔[4]を止め、菩提を護り増長せしめたまえ。

【現代語訳】

正しいさとりの海［である仏］と、浄らかな法と、不滅なる僧とに頂礼して、深く鋭い智ある者のために字句を解釈する典籍を開き示します。

まさに仏と菩薩と声聞とを敬って、
教法によって自らと他を利益せしめ、簡潔に字音の論を創出します。
過去・未来・現在の仏と菩薩とに帰命します。
広大な［仏の］いつくしみによって神通力を及ぼし、
願わくば私に揺るぎない確信を与え、
大いなるあわれみによって、四つの魔を止め、
さとりを護り増大させてください。

1 勒那摩提訳では、「頂礼正覚海」以下の帰敬偈を欠く。
2 毘伽典とは、vyākaraṇa のことで、九部経・十二部経の一つ。もともとは教説の分析的な解説を意味していた。
3 勒伽弁とは、吉蔵に依れば、摩徳勒伽（mātṛkā）のこと。mātṛkā とは十二部経の一つで、もともと論議の内容を意味していたが、これが発達して論蔵となった。ここでは、『法華経』に対する論ということを意味している。
4 四魔とは人々を悩ませる四つの存在。（一）煩悩魔（身心を悩ます貪などの煩悩）、（二）蘊魔（種々の苦しみを生ずる五蘊）、（三）死魔（死）、（四）天魔（人々の善行を妨げる他化自在天の魔）のこと。

初　以七成就釈序説分七

法華経本文

【テキスト】(p. 1a, *ll.* 12-25)(勒 p. 10c, *ll.* 8-19)

妙法蓮華経序品第一

如是我聞。一時仏住王舎城耆闍崛山中。与大比丘衆万二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已尽無復煩悩。心得自在善得心解脱善得慧解脱。心善調伏。人中大龍。応作者作。所作已弁。離諸重担。逮得己利。尽諸有結。善得正智心解脱。一切心得自在到第一彼岸。菩薩摩訶薩八万人。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退転。皆得陀羅尼大弁才楽説。転不退転[5]法輪。供養無量百千諸仏。於諸仏所種諸善根。常為諸仏之所称歎。以大慈悲而修身心。善入仏慧通達大智到於彼岸。名称普聞無量世界。能度無数百千衆生。

【書き下し文】

妙法蓮華経序品第一

「是くの如く、我、聞けり。一時、仏は王舎城の耆闍崛山中に住したまいき。大比丘衆万二千人と倶なりき。皆、是れ、阿羅漢なり。[6]諸の漏は已に尽き、復た煩悩無く、心に自在を得、善く心解脱を得、善く慧解脱を得、心は善く調伏し、人中の大龍なり。応に作すべきは作し、作す所は已に弁じ、諸の重担を離れ、己利を逮得し、諸の有結を尽くし、善く正智・心解脱を得、一切心に自在を得、第一なる彼岸に到れり。菩薩・摩訶薩[7]は八万人なり。皆、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退転せず、皆、陀羅尼[8]を得、大弁才もて楽説し、不退転の法輪を転ず。無量百千の諸仏を供養し、諸の仏所に於いて諸の善根を種え、常に諸仏の称歎する所と為り、大慈悲を以て身心を修し、善く仏慧に入り、大智に通達し、彼岸に到り、名称は普く無量の世界に聞こえ、能く無数百千の衆生を度

せり。」

【現代語訳】

妙法蓮華経序品第一

「このように、わたしは聞いた。ある時、仏は王舎城の耆闍崛山のなかにとどまられ、大勢の比丘たち、一万二千人とともにおられた。彼らはみな阿羅漢で、諸々の心の汚れを滅し尽くし、また煩悩なく、心に自在を得て、心の解脱を得、智慧による解脱を得、心を善く制御し、人々のうちの偉大な龍であった。作すべきことを作し、作すべきことは既に作し終わり、諸々の重荷を離れ、自己のさとりという利益を得て、すべての生死の迷いをひきおこす煩悩の束縛を断ち、よく正しい智慧と心の解脱を得、すべての心に自在を得、究極のさとりの彼岸に到っていた。」

「また、偉大な菩薩たち八万人がいた。みな、無上の正しいさとりに達しようとして退くことがなかった。彼らはみなダーラニーを得ており、人々に自在に法を説く弁舌の才を有していて、退き後戻りすることのない教えの輪を廻し、数え切れない程の仏たちを供養して、それらの仏のみもとで多くの善の根本をつちかい、常に仏たちに讃歎され、大いなる慈しみとあわれみをもってその身と心を修めて、巧みに仏の智慧に入り、大いなる智慧に達して、さとりの彼岸に到達し、その名はあまねく無量の世界に聞こえて、数え切れないほどの数の衆生を［彼岸に］渡した。」

5　勒那摩提訳では、「転」の字を欠く。
6　『法華論』では阿羅漢の叙述に十六句を挙げるが、梵文『法華経』では十八句となっている。その対応については、附表を参照。
7　『法華論』では菩薩摩訶薩の叙述に十三句を挙げる。梵文『法華経』でも十三句となっている。その対応については、附表を参照。

8 dhāraṇi の音写。「保持すること」の意で、教法を心にとどめて忘失しないという意味がある。普通は神秘的な力を有する章句・呪文を指す。

分段

【テキスト】(p. 1a, *l*. 26-p. 1b, *l*. 5)

(勒 p. 10c, *ll*. 19-24)

釈曰。[1]此経法門。[2]初第一品示現[3]七種功徳成就。此義応知。[4]何等為七。一者序分成就。二者衆成就。三者如来欲説法時至成就。四者依[5]所説法威儀随順[6]住成就。五者依止説因成就。六者大衆現前欲聞法成就。七者文殊師利菩薩[7]答成就。

【書き下し文】

釈して曰く。此の経の法門、初めの第一品は、七種の功徳の成就を示現す。此の義、応に知るべし。何等をか七と為すや。

一には、序分成就。

二には、衆成就。

三には、如来欲説法時至成就。

四には、依所説法威儀随順住成就。

五には、依止説因成就。

六には、大衆現前欲聞法成就。

七には、文殊師利菩薩答成就なり。

【現代語訳】

注釈していう。この『[法華]経』の教えのうち、初めの第一章は、七つの特性が完成していることを示している。

このことを知らなければならない。七つとは何か。

第一に、序の部分という［特性の］完成である。

第二に、［教えを聞こうとして集まっている］人々という［特性の］完成である。

第三に、如来が法を説こうとする時が来ているという［特性の］完成である。

第四に、［あることに］依拠して説法し、厳かなる振る舞いに準拠して維持しているという［特性の］完成である。

第五に、法を説く原因が［衆生に］依っているという［特性の］完成である。

第六に、法を聞きたいという望みが大衆に現れているという［特性の］完成である。

第七に、文殊師利菩薩が答えているという［特性の］完成である。

1 勒那摩提訳では、「釈曰」を欠く。
2 勒那摩提訳では、「此経法門」を「此法門中」とする。
3 勒那摩提訳では、「示現」を「明」とする。
4 勒那摩提訳では、「此義応知」を欠く。
5 勒那摩提訳では、「依所」を「所依」とする。
6 勒那摩提訳では、「威儀随順」を「随順威儀」とする。
7 勒那摩提訳では、「菩薩」を欠く。

一　序分成就

【テキスト】(p. 1b, *ll.* 6-11)
(勒 p. 10c, *l.* 24p. 11a, *l.* 3)

序分成就者。[8]此法門中[9]示現二種勝義[10]成就。此義応知。[11]何等為二。一者示現諸法門中[12]最勝義[13]成就。二者示現自在功徳義成就。[14]如王舎城。勝於一切諸余城舎。[15]耆闍崛山勝余諸山。[16]顕此法門最勝義故。[17]如経婆伽婆住[18]王舎城耆闍崛山中故。

【書き下し文】

「序分成就」とは、此の法門中、二種の勝義の成就を示現す。此の義、応に知るべし。何等をか二と為すや。

一には、諸の法門中の最勝義の成就を示現す。

二には、自在なる功徳の義の成就を示現す。王舎城の、一切の諸の余の城舎より勝れ、耆闍崛山の、余の諸山より勝れたるが如きは、此の法門の最勝義を顕すが故なり。経の如く[19]「婆伽婆は王舎城の耆闍崛山中に住したまいし」が故なり。

【現代語訳】

「序の部分という［特性の］完成」とは、この［『法華経』という］教えの中で、二種のすぐれた意義が完成していることを示している。このことを知らなければならない。二種とは何か。第一に、諸々の教えの中で最も優れた意義が完成していることを示している。第二に、自在である功徳の意義が完成していることを示している。

王舎城が他のすべての城よりも優れているということ、また、耆闍崛山が他のすべての山より優れているというようなことは、この［『法華経』という］教えが最も優れた意義のものであることを顕しているからである。『［法華］経』において「尊師は、王舎城の耆闍崛山のなかにとどまられ」とあるように。

8 勒那摩提訳では、「又序分成就者」とし、「又」の字を加える。
9 勒那摩提訳では、「中」の字を欠く。
10 勒那摩提訳では、「勝」の字を欠く。
11 勒那摩提訳では、「此義応知」を欠く。
12 勒那摩提訳では、「示現一切諸法門中」とあり、「一切」の字を加える。
13 勒那摩提訳では、「義」の字を欠く。
14 勒那摩提訳では、「成就」の後に「故」の字を加える。
15 勒那摩提訳では、「勝於一切諸城舎」を「勝余一切城舎故」とする。
16 勒那摩提訳では、「諸山」の後に「故」の字を加える。
17 勒那摩提訳では、「顕此法門最勝義故」を欠く。
18 勒那摩提訳では、「婆伽婆住」を「如是我聞一時仏住」とする。
19 『妙法華』「仏住王舎城耆闍崛山中」（『大正蔵』第九巻、一頁下、十九行目）と対応する。

二　衆成就　○　（分段）

【テキスト】（p. 1b, *ll.* 12-14）（勒 p. 11a, *ll.* 3-5）　【書き下し文】

衆成就者。有四種義故[1]。成就示現応知[2]。何等為四。一者数成就。二者行成就。三者摂功徳成就。四者威儀如法住成就。

「衆成就」とは、四種の義あるが故に、成就の示現、応に知るべし。何等をか四と為すや。一には、数成就。二には、行成就。三には、摂功徳成就。四には、威儀如法住成就なり。

【現代語訳】

「[教えを聞こうとして集まっている]人々という[特性の]完成」とは、四種の意義がある。完成の示現を知らなければならない。四種とは何か。

第一に、数という[特性の]完成である。

第二に、行という[特性の]完成である。

第三に、功徳をあわせているという[特性の]完成である。

第四に、厳かな振る舞いが法に従って持続しているという[特性の]完成である。

---

1 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。

2 勒那摩提訳では、「示現応知」を欠く。

衆成就　一　数成就

【テキスト】(p. 1b, *l.* 15)(勒 p. 11a, *l.* 6)　【書き下し文】

数成就者。諸大衆無数故。

「数成就」とは、諸の大衆は無数なるが故なり。

【現代語訳】

「数という[特性の]完成」と[いうの]は、諸々の[教えを聞こうとして集まっている]大勢の人々の数は無数であるからである。

衆成就　二　行成就

【テキスト】(p. 1b, *ll.* 15-21)（勒 p. 11a, *ll.* 6-12)

行成就者有四種。一者謂[3]諸声聞修小乗行。二者謂[4]諸菩薩修大乗行。三者謂[5]諸菩薩神通自在[6]随時示現。能修[7]行大乗。如颰陀波羅菩薩等十六大賢士。[8]具足菩薩不可思議事。而常[9]示現種種形相。謂[10]優婆塞・優婆夷・比丘・比丘尼等。[11]四者謂[12]出家声聞[13]威儀一定。不同菩薩故。

【書き下し文】

「行成就」とは、四種有り。[14]

一には、諸の声聞の、小乗の行を修するを謂う。

二には、諸の菩薩の、大乗の行を修するを謂う。

三には、諸の菩薩の、神通自在にして、随時に示現し、能く大乗を修行するを謂う。颰陀波羅菩薩等の十六大賢士、[15]菩薩の不可思議事を具足して、常に種種の形相を示現するが如し。謂く、優婆塞・優婆夷・比丘・比丘尼等なり。

四には、出家せる声聞の、威儀一定なるを謂う。菩薩と同じからざるが故なり。

【現代語訳】

「行という［特性の］完成」には四種ある。第一に、諸々の声聞であって、小乗の行を修める者たちである。

第二に、諸々の菩薩であって、大乗の行を修める者たちである。

第三に、諸々の菩薩であって、神通力を思うままにし、随時に示現し、巧みに大乗［の行］を修行する者たちである。颰陀波羅菩薩等の十六大賢士が、菩薩の不可思議な事柄を具え、常に種々の様相を示すように。［それは］優婆

塞、優婆夷、比丘、比丘尼等である。

第四に、出家した声聞であって、振る舞いは一定の者たちである。菩薩［の振る舞いの場合］と同じではないからである。

3 勒那摩提訳では、「謂」の字を欠く。
4 勒那摩提訳では、「謂」の字を欠く。
5 勒那摩提訳では、「謂」の字を欠く。
6 勒那摩提訳では、「神通自在」を欠く。
7 勒那摩提訳では、「修」の字を欠く。
8 勒那摩提訳では、「颺陀波羅菩薩等十六大賢士」を「颺陀婆羅等十六人」とする。
9 勒那摩提訳では、「常」の字を「能」とする。
10 勒那摩提訳では、「謂」の字を欠く。
11 勒那摩提訳では、「故」の字を加える。
12 勒那摩提訳では、「謂」の字を欠く。
13 勒那摩提訳では、「声聞」を「人」とする。
14 『法華論』は行により人々を四種に分けるが、『妙法華』は二種に分けるのみである。すなわち、「其名曰阿若憍陳如。摩訶迦葉。」以下に列挙されている、阿羅漢や学・無学と言われる者たち（『大正蔵』第九巻、一頁下、二二行目～二頁上、二行目）と、「其名曰文殊師利菩薩。観世音菩薩。」以下に列挙されている、菩薩摩訶薩と言われる者たち（『大正蔵』第九巻、二頁上、八行目～一四行目）とである。これらはそれぞれ、『法華論』の言う「一者謂諸声聞修小乗行」と「二者謂諸菩薩修大乗行」とに相当すると思われる。一方、梵文『法華教』（ケルン南條本（KN.）は、三種に分ける。それらは、それぞれ『法華論』の第一、第二、第三のグループに相当すると思われる（第一グループ：KN. p.1, *l.*9 - p.2, *l.* 10°. 第二グループ：KN. p.3, *ll.*3 - 10°. 第三グループ：KN. p.3, *l.*10 -p.4,*l.*

2)。『妙法華』、梵文『法華経』とも、『法華論』の第四グループに相当する者たちは挙げていないようである。

15 バドラパーラ（賢護）を長とする十六人の賢士（satpuruṣa）。梵文『法華経』は次のように言う。bhadrapālapūrvaṃgamaiś ca ṣoḍaśabhiḥ satpuruṣaiḥ sārdham/tadyathā/（一）bhadrapālena ca（二）ratnākareṇa ca（三）susārthavāhena ca（四）naradattena ca（五）guhyaguptena ca（六）varuṇadattena ca（七）indradattena ca（八）uttaramatinā ca（九）viśeṣamatinā ca（十）vardhamānamatinā ca（十一）amoghadarśinā ca（十二）susaṃprasthitena ca（十三）suvikrāntavikrāmiṇā ca（十四）anupamamatinā ca（十五）sūryagarbhena ca（十六）dharaṇīṃdhareṇa ca/（KN.p.3,l.10-p.4,l.2）このうち bhadrapāla が颰陀波羅に相当する。これらの名称は、菩提流支訳『勝思惟梵天所問経』（『大正蔵』第十五巻、六二頁中）に挙げられる十六菩薩の名称とほぼ一致する（羅什訳『思益梵天所問経』では一部異なる）。漢訳法華経では十六名を一団として扱うことはしないが、『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上）には「跋陀婆羅」「宝積」「導師」の三菩薩、『正法華』（『大正蔵』第九巻、六三頁上）には「大導師」「水天」「帝天」の三菩薩の名が見られる。

衆成就　三　摂功徳成就　〇　（分段）

【テキスト】（p. 1b, *ll.* 22-25）（勒 p. 11a, *ll.* 12-14）

皆是阿羅漢等有[16]十六句。示現声聞功徳成就[17]。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退転等有[18]十三句。示現菩薩功徳成就[19]。

【書き下し文】

「皆、是れ阿羅漢なり」等、十六句有り。声聞功徳成就を示現す。

「皆、阿耨多羅三藐三菩提に於て退転せず」等、十三句有り。菩薩功徳成就を示現す。

【現代語訳】

「彼らはみな阿羅漢であった」云々には十六の語句がある。[これらの語句は]声聞の功徳が完成していることを示している。

「みな、無上の正しいさとりに達しようとして退くことがなかった」云々には十三の語句がある。[これらの語句は]菩薩の功徳が完成していることを示している。

16 勒那摩提訳では、「有」を「者」とする。
17 勒那摩提訳では、「故」の字を加える。
18 勒那摩提訳では、「皆不退転阿耨多羅三藐三菩提等者」とする。
19 勒那摩提訳では、「故」の字を加える。

衆成就　三　摂功徳成就　一　（声聞功徳成就　〇　分段）

【テキスト】(p. 1b, *ll.* 26-28)（勒 p. 11a, *ll.* 14-17)　【書き下し文】

声聞[20]功徳成就者。彼十六句三門摂義示現[21]応知。何等三門。一者上上起門。二者総別相門。三者摂取事門。

「声聞功徳成就[22]」とは、彼の十六句、三門の摂の義の示現なり。応に知るべし。何等をか三門となる。一には、上上起門。二には、総別相門。三には、摂取事門なり。

【現代語訳】

「声聞の功徳が完成していること」とは、上述の十六の語句が、三つの観点から、包括的に意義を示していることである。[このことを]知らなければならない。三つの観点とは何か。第一に、上上起門（先々の文句に基づいて後々の文句が起こるという観点）、第二に、総別相門（総論各論という観点）、第三に、摂取事門（事柄を包括するという観点）である。

---

20 勒那摩提訳では、「声聞」を「阿羅漢」とする。
21 勒那摩提訳では、「彼十六句示現三種門摂義」とする。
22 摂功徳成就のうちの一つである。（『大正蔵』二六巻、一頁中、二二行目）

衆成就　三　摂功徳成就　一　（声聞功徳成就　一　上上起門）

【テキスト】(p. 1b, *l.* 29-p. 1c, *l.* 20)

(勒 p. 11a, *l.* 17-p. 11b, *l.* 7)

上上起門者。謂諸漏已尽故名為阿羅漢[23]。以心得自在故名為諸漏已尽[24]。以無復煩悩故名為心得自在[25]。以善得心解脱善得慧解脱故名為心自在[26]。以遠離能見所見故名為無復煩悩[27]。以善

【書き下し文】

「上上起門」とは、謂く、
「諸の漏は已に尽くる」が故に、名づけて「阿羅漢なり」と為す。
「心に自在を得る」を以ての故に、名づけて「諸の漏は已に尽く」と為す。

得心解脱善得[31]慧解脱故名為心善調伏。人中大龍者。行諸悪道如平坦路無所拘礙。応行者已行。応到処已到故。応作者作[33]。人中大龍已得[34]対治降伏煩悩之[35]怨敵故。所作已弁者。更不後生如相応事已成就[36]故。離諸重担者。以応作者作所作已弁後生重担已捨離[37]故逮得己利者已捨重担証涅槃故。尽諸有結者。以[38]逮得己利断諸煩悩因故。善得正智心解脱者。諸漏已尽故。一切心得自在者。善知見道修道智故。到第一彼岸者。善得正智心解脱[39]善得神通無諍三昧等諸功徳故。大阿[40]羅漢等者。心得自在到彼岸故。衆所知識者。諸王王子大臣人民帝釈天王梵天王[41]皆識知故。又[42]復声聞菩薩仏等是勝智者。[43]彼勝智者皆悉[44]善知。是故名為衆所知識。[45]

「復た煩悩無き」を以ての故に、名づけて「心に自在を得」と為す。

「善く心解脱を得、善く慧解脱を得る」を以ての故に、名づけて「心に自在を得」と為す。

能見・所見を遠離するを以ての故に、名づけて「復た煩悩無し」と為す。

「善く心解脱を得、善く慧解脱を得る」を以ての故に、名づけて「心は善く調伏す」と為す。

「人中の大龍なり」とは、諸の悪道を行くこと、平坦の路の拘礙する所無きが如くにして、応に行ずべきは已に行じ、応に到るべき処は已に到るが故なり。

「応に作すべきは作し」[とは、]「人中の大龍」は、已に対治を得、煩悩の怨敵を降伏するが故なり。

「作す所は已に弁じ」とは、更に後に生ぜず、相応の事の如く已に成就するが故なり。

「諸の重担を離れ」とは、「応に作すべきは作し、作す所は已に弁ずる」を以て、後生の重担を已に捨離するが故なり。

「己利を逮得し」とは、已に重担を捨て、涅槃を証するが故なり。
「諸の有結を尽くし」とは、「己利を逮得し」、諸の煩悩の因を断ずるを以ての故なり。
「善く正智・心解脱を得」とは、「諸の漏は已に尽くる」が故なり。
「一切の心に自在を得」とは、善く見道と修道との智を知るが故なり。
「第一なる彼岸に到れり」とは、「善く正智・心解脱を得」、善く神通、無諍三昧等の諸の功徳を得るが故なり。
「大阿羅漢等」とは、「心に自在を得」、彼岸に到るが故なり。
「衆の知識する所」とは、諸の王・王子・大臣・人民・帝釈天王・梵天王等、皆識知するが故なり。又復た、声聞・菩薩・仏等、是れ勝智者なり。彼の勝智者、皆悉く善く知る。是の故に、名づけて「衆の知識する所」と為す。

【現代語訳】

「上上起門」（先々の文句に基づいて後々の文句が起こるという観点）とは、以下のようなものである。
「すべての心の汚れを滅し尽くし」ているので「阿羅漢」と呼ばれるのである。

「心に自在を得」ているので「すべての心の汚れを滅し尽くし」たと呼ばれるのである。

「また煩悩もなく」なっているので「心に自在を得」たと呼ばれるのである。

「よく心の解脱を得、よく智慧による解脱を得」ているので「心に自在を得」たと呼ばれるのである。

主観客観の対立を離れているので「また煩悩もなく」なっていると呼ばれるのである。

「よく心の解脱を得、よく智慧による解脱を得」ているので「心をよく制御し」ていると呼ばれるのである。

「人々の中の偉大な龍」と［言われるの］は、妨げのない平坦な道を行くように悪路を行き、行うべきことをすでに行い、到るべき処にすでに到っているからである。

「作すべきことを作した」［と言われるのは］「人々の中の偉大な龍」は、すでに煩悩という［敵の］対治手段を得て、降伏させているからである。

「作すべきことをすでに作し終えた」と［言われるの］は、再び来世に生まれることがなく、ふさわしい事柄をすでに完成したからである。

「諸々の重荷を離れた」［と言われるのは］「作すべきことを作し、作すべきことをすでに作し終えた」ことによって、来世に生まれる重荷をすでに捨て去ったからである。

「自己のさとりという利益を得た」［と言われるのは］すでに重荷を捨て去り、涅槃を体得したからである。

「すべての生死の迷いをひきおこす煩悩の束縛を断つ」と［言われるのは］「自己のさとりという利益を得」て、諸々の煩悩の原因を断っているからである。

「よく正しい智慧と心の解脱を得た」［と言われるのは］「諸々の心の汚れを滅し尽くし」たからである。

「すべての心に自在を得た」［と言われるのは］よく見道と修道の智慧を知っているからである。

「究極のさとりの彼岸に到った」［と言われるのは］「よく正しい智慧と心の解脱を得」て、さとりの彼岸に到っているからである。

「偉大な阿羅漢たち」［と言われるのは］「心に自在を得」て、さとりの彼岸に到っているからである。

「人々によく知られた」［と言われるのは］諸々の王、王子、大臣、人民、帝釈天王、梵天王等がみな［彼らを］知っているからである。また、声聞、菩薩、仏等は勝れた智者であるが、その勝れた智者がみな［彼らを］知っている。それ故に、「人々によく知られた」と呼ばれるのである。

23 勒那摩提訳では、「阿」の字を欠く。
24 勒那摩提訳では、「為」の字を欠く。
25 勒那摩提訳では、「諸漏已尽」の後に、「諸漏已尽故名為阿羅漢」を加える。
26 勒那摩提訳では、「以無復煩悩故」を「以心無煩悩故」とする。
27 勒那摩提訳では、「為」の字を欠く。
28 勒那摩提訳では、「為」の字を欠く。
29 勒那摩提訳では、「為」の字を欠く。
30 勒那摩提訳では、「以」を「已」とする。
31 勒那摩提訳では、「善得」を欠く。
32 勒那摩提訳では、「為」の字を欠く。
33 勒那摩提訳では、「応作者已作」とし「已」の字を加える

34 勒那摩提訳では、「得」を「尽」とする。
35 勒那摩提訳では、「之」の字を欠く。
36 勒那摩提訳では、「就」の字を欠く。
37 勒那摩提訳では、「離」の字を欠く。
38 勒那摩提訳では、「以」を「已」とする。
39 勒那摩提訳では、「善得正智心解脱」を「善得正智心得解脱」とする。
40 勒那摩提訳では、「阿」の字を欠く。
41 勒那摩提訳では、「諸王子大臣帝釈梵天王」とする。
42 勒那摩提訳では、「又」の字を欠く。
43 勒那摩提訳では、「者」の字を欠く。
44 勒那摩提訳では、「悉」の字を欠く。
45 勒那摩提訳では、「是故名為衆所知識」を「故名衆所知識」とする。

衆成就　三　摂功徳成就　一　（声聞功徳成就　二　総別相門）

【テキスト】(p. 1c, *l*. 21-p. 2a, *l*. 6)　【書き下し文】

(勒 p. 11a, *ll*. 7-21)

総別相門者。皆是阿羅漢等十六句。初句是総。余句別故。彼阿羅漢名之為応。有十五種応義応知。何等十五。一者応受飲食臥具供養恭敬等故。二者応将大衆教化一切故。三者応入聚

総別相門とは、「皆是れ阿羅漢」等の十六句にして、初句は是れ総、余句は別なるが故なり。彼の阿羅漢は之を名づけて「応」と為す。十五種の「応」の義有り。応に知るべし。何等をか十五なる。一には、応に飲食・臥具・供養・恭敬等を受くべきが故なり。

落城邑等故。四者応降伏諸外道等故。五者応以智慧速観察法故。六者応不疾不遅説法如法相応不疲倦故。七者応静坐空閑処。飲食衣服一切資生不積不聚少欲知足故。八者応一向行善行不著諸禅故。九者応行空聖行故。十者応行無相聖行故。十一者応行無願聖行故。十二者応降伏世間禅浄心故。十三者応起諸通勝功徳故。十四者応証第一義勝[52]功徳故。十五者応如実知同生諸衆得諸功徳為利益一切諸[53]衆生故。

二には、応に大衆を将いて一切を教化すべきが故なり。三には、応に聚落・城邑等に入るべきが故なり。四には、応に諸の外道等を降伏すべきが故なり。五には、応に智慧を以て速やかに法を観察すべきが故なり。六には、応に疾からず遅からず法を説くに、法の如く相応して疲倦せざるべきが故なり。七には、応に空閑所に静坐し、飲食・衣服・一切の資生を積まず聚めず、欲少なく足るを知るべきが故なり。八には、応に一向に善行を行じ、諸の禅に著せざるべきが故なり。九には、応に空の聖行[55]を行ずべきが故なり。十には、応に無相の聖行を行ずべきが故なり。十一には、応に無願の聖行を行ずべきが故なり。十二には、応に世間禅の浄心を降伏すべきが故なり。十三には、応に諸通の勝るる功徳を起すべきが故なり。十四には、応に第一義の勝るる功徳を証すべきが故なり。十五には、応に如実に同生[56]の諸衆を知り、諸の功徳を得て、為に一切の諸の衆生を利益すべきが故なり。

【現代語訳】

「総別相門」（総論各論という観点）というのは、「皆是れ阿羅漢」等の十六句のうちの初めの句が総論であり、残りの句は各論であるからである。その阿羅漢は「応（＝ふさわしい）」とも名付けられる。「応（＝ふさわしい）」には、十五種の意味がある。［このことを］知らなければならない。十五とは何か。

第一に、飲食・臥具・供養・恭敬などを受けるにふさわしいからである。

第二に、大勢の衆生を率いて［彼らを］みな教化するにふさわしいからである。

第三に、聚落や都市などに入るのにふさわしいからである。

第四に、諸々の外道などを説き伏せるにふさわしいからである。

第五に、智慧によって速やかに法を観察するにふさわしいからである。

第六に、疾くもなく遅くもなく教えを説く場合に、［それが］理法に合致しており、［しかも］倦み疲れないのにふさわしいからである。

第七に、閑静な所に静かに座り、飲食・衣服・一切の必需品などを蓄えることがなく、少欲知足にふさわしいからである。

第八に、ひたすらに善行を行じ、諸々の禅定に執着しないことにふさわしいからである。

第九に、空の聖行を行ずるにふさわしいからである。

第十に、無相の聖行を行ずるにふさわしいからである。

第十一に、無願の聖行を行ずるにふさわしいからである。

第十二に、世間的な禅定における浄らかな心を降伏するにふさわしいからである。
第十三に、諸々の神通力の勝れた功徳を起こすにふさわしいからである。
第十四に、第一義の勝れた功徳を体得するにふさわしいからである。
第十五に、あるがままに仏の教えを奉ずる人々を知り、様々な功徳を得て、それによって一切の衆生を利益するにふさわしいからである。

46 勒那摩提訳では、「相」の字を欠く。
47 勒那摩提訳では、「阿」の字を欠く。
48 勒那摩提訳では、「是」の字を欠く。
49 勒那摩提訳では、「余句別故」の後に、「皆是羅漢者」を加える。
50 勒那摩提訳では、「彼阿羅漢名之為応。有十五種」を、「彼羅漢名有十五種」とする。
51 勒那摩提訳では、「何等十五」を欠く。
52 勒那摩提訳では、「勝」の字を欠く。
53 勒那摩提訳では、「諸」の字を欠く。
54 「応」としているのは、arhat の字義をとったものと考えられる。arhat はしばしば「応供（＝供養に値する）」と訳されるが、それはここに挙げられる十五の意味のうちの第一に相当する。
55 これら空・無相・無願は、三つの禅定、すなわち三解脱門である。
56 吉蔵はこの「同生」を仏の口から生まれた者とする（『大正蔵』第四十巻、七八九頁中）。仏の口から生まれた者とは、『法華経』「方便品」の記述に由来する（『大正蔵』第九巻、六頁下）。

衆成就　三　摂功徳成就　一　（声聞功徳成就　三　摂取事門）

【テキスト】（p. 2a, *ll.* 6-24）

（勒 p. 11b, *l.* 21-p.11c, *l.* 9）

摂取事門者。此十五句。摂取十種功徳。応知。[57]示現可説果不可説果故。何等為十。[58]一者摂取徳功徳[59]二句示現。如経諸漏已尽無復煩悩故。二者三句摂取諸功徳。一句降伏世間功徳。如経心得自在故。二句降伏出世間学人功徳。如経善得心解脱善得慧解脱故。三者摂取不違功徳。随順如来教作[60]故。如経心善調伏故。四者摂取勝功徳。如経人中大龍故。五者摂取所応作勝功徳。所応作者。謂能[61]依法供養恭敬尊重如来。[62]如経応作者作故。六者摂取満足功徳。満足学地故。如経所作已弁故。七者三句摂取過功徳。一者過愛。[63]二者過求命供養恭敬。[64]三者過上下界。已過学地故。如経離諸重担故。逮得己利故。[65]尽諸有結故。八者摂取上上功徳。

【書き下し文】

摂取事門とは、此の十五句[66]もて、十種の功徳を摂取す。応に知るべし。可説の果と不可説の果とを示現するが故なり。[67]何等をか十と為すや。

一には、摂取の徳・功徳を二句もて示現す。経の如く[68]「諸の漏は已に尽き、復た煩悩無き」が故なり。

二には、三句もて諸の功徳を摂取す。一句は、世間の功徳を降伏す。経の如く[69]「心に自在を得る」が故なり。二句は、出世間の学人の功徳を降伏す。経の如く[70]「善く心解脱を得、善く慧解脱を得る」が故なり。[71]

三には、不違の功徳を摂取す。如来の教・作に随順するが故なり。経の如く[72]「心は善く調伏せる」が故なり。

四には、勝るる功徳を摂取す。経の如く[73]「人中の大龍」なるが故なり。

五には、所応作の勝るる功徳を摂取す。所応作とは、能く法に依

如経善得正智心解脱故。九者摂取応作利益衆生功徳。如経一切心得自在故。十者摂取上首功徳。如経到第一彼岸故。

り、如来を供養・恭敬・尊重するを謂う。経の如く[74]「応に作すべきを作せる」が故なり。

六には、満足の功徳を摂取す。学地を満足するが故なり。経の如く[75]「作す所は已に弁ぜる」が故なり。

七には、三句もて過の功徳を摂取す。一は愛を過ぐ。二は求命の供養・恭敬を過ぐ。三は上下界を過ぐ。已に学地を過ぐるが故に。経の如く[76]「諸の重担を離れたる」が故なり。「已利を逮得せる」が故なり。「諸の有結を尽くせる」が故なり。

八には、上上功徳を摂取す。経の如く[77]「善く正智・心解脱を得たる」が故なり。

九には、応に衆生を利益すべき功徳を摂取す。経の如く[78]「一切の心に自在を得たる」が故なり。

十には、上首の功徳を摂取す。経の如く[79]「第一なる彼岸に到れる」が故なり。

【現代語訳】

「摂取事門」（事柄を包括するという観点）とは、この［初句以外の］十五句によって、十種の功徳を包括していることである。［このことを］知らなければならない。［十五句は］説くことのできる果と説くことのできない果を示し

ているからである。十とは何か。

第一に、[阿羅漢の]摂取すべき徳や功徳を二つの句によって示しているのである。『[法華]経』において「諸々の心の汚れを滅ぼし尽くし、また煩悩も無い」とあるように。

第二に、三つの句によって諸々の功徳を摂取するのである。一つの句は、[阿羅漢が]世間の人々の功徳に勝っている[ことを示している]。『[法華]経』において「心に自在を得ている」とあるように。[残りの]二つの句は、[阿羅漢が]出世間の学人の功徳に極めて勝っている[ことを示している]。『[法華]経』において「善く心の解脱を得ている」「善く智慧による解脱を得ている」とあるように。

第三に、[教えに]違わない功徳を摂取するのである。[阿羅漢はみな]如来の教え・行いに随っているからである。『[法華]経』において「心を善く制御している」とあるように。

第四に、[阿羅漢の]勝れた功徳を摂取するのである。『[法華]経』において「人々の中の偉大な龍である」とあるように。

第五に、作すべきことの勝れた功徳を摂取するのである。作すべきこととは、法に従って、如来を供養・恭敬・尊重することである。『[法華]経』において「作すべきことを作している」とあるように。

第六に、[学地を]満たした功徳を摂取するのである。[阿羅漢はみな]学地を満たしているからである。『[法華]経』において「作すべきことをすでに作し終わっている」とあるように。

第七に、三つの句によって[あるものを]超克しているという功徳を摂取するのである。

一には渇愛を超克している。

二には生活手段として供養・恭敬を［受けることを］超克している。三には上下界［である三界］を超克している。［阿羅漢はみな］すでに学地を学び終わっているからである。『［法華］経』において「諸の重荷を離れている」「自己のさとりという利益を得ている」「諸々の有結を尽くしている」とあるように。

第八に、［阿羅漢の］最高の功徳を摂取するのである。『［法華］経』において「善く正しい知慧と心の解脱を得ている」とあるように。

第九に、衆生を利益しなければならないことの功徳を摂取するのである。『［法華］経』において「すべての心に自在を得ている」とあるように。

第十に、長としての功徳を摂取するのである。『［法華］経』において「究極のさとりという彼岸に到達している」とあるように。

57 勒那摩提訳では、「応知」を欠く。
58 勒那摩提訳では、「何等為十」を欠く。
59 勒那摩提訳では、「得」とするが、吉蔵の疏が「徳功徳」としている（『大正蔵』第四十巻、七八九頁下）のに従う。
60 勒那摩提訳では、「作」を「行」とする。
61 勒那摩提訳では、「謂能」を欠く。
62 勒那摩提訳では、「故」の字を加える。
63 勒那摩提訳では、「愛」を「受」とする。

64 勒那摩提訳では、「故」の字を加える。

65 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。

66 十六句のうちの「是皆阿羅漢」という句を除く残り十五句のこと。

67 吉蔵によると、説くことのできる果は有為であり、説くことのできない果は無為である。(『大正蔵』第四十巻、七八九頁中)

68 『妙法華』(『大正蔵』第九巻、一頁下、二〇～二一行目)にそのままの形で存在する。

69 『妙法華』(『大正蔵』第九巻、一頁下、二一～二二行目)にそのままの形で存在する。

70 『妙法華』には見られない。梵本には、apahatabhārair anuprāptasvakārthair niḥkleśaiḥとあり『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 7)

71 「善得心解脱。善得慧解脱」という句は、阿羅漢が出世間の学人の徳よりも極めて優れている、具体的には阿羅漢の解脱は出世間人の解脱に勝るという趣意を示している。これに類似した解釈は、『智度論』においても挙げられている。『智度論』は阿羅漢の特質を示す「心得好解脱　慧得好解脱」という文句を次のように解する。学人心雖得解脱。非好解脱。何以故。有残結使故。(『大正蔵』第二十五巻、八十頁中)

72 『妙法華』には見られない。梵文『法華経』には、ājāneyaiḥとあり『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 7)

73 『妙法華』には見られない。梵文『法華経』には、mahānāgaiḥとあり『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 7)

74 『妙法華』には見られない。梵文『法華経』には、kṛtakṛtyaiḥとあり『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 7)

75 『妙法華』には見られない。梵文『法華経』には、kṛtakaraṇīyaiḥ『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 7)

76 『妙法華』では「逮得己利。尽諸有結」の二句のみある。(『大正蔵』第九巻、一頁下、二一～二二行目)「離諸重担。逮得己利。尽諸有結」の三句は、梵文『法華経』には、apahatabhārair anuprāptasvakārthair niḥkleśaiḥとあり『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 7)

77 『妙法華』には見られない。梵文『法華経』には、suvimuktacittaiḥ suvimuktaprajñaiḥとあり『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 7)

78 『妙法華』には見られない。梵文『法華経』には、sarvacetośitā とあり、『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 8)

79 『妙法華』には見られない。梵文『法華経』には、-paramapāramitāprāptaiḥとあり『法華論』の引用文句と対応している。(KN. p. 1, l. 9)

衆成就　三　摂功徳成就　二　（菩薩功徳成就　〇　分段）

【テキスト】(p. 2a, ll. 25-27)（勒 p. 11c, ll. 9-11)　【書き下し文】

菩薩功徳成就者。彼十三句二門摂義示現。応知。[80] 何等二門。[81] 一者上支下支門。二者摂取事門。

「菩薩功徳成就」とは、彼の十三句、二門の摂の義の示現なり。応に知るべし。何等をか二門なる。一には上支下支門、二には摂取事門なり。

【現代語訳】

「菩薩の功徳が完成していること」とは、前述の十三の語句が、二つの観点から包括的に意義を示していることである。［このことを］知らなければならない。「二つの観点」とは何か。第一は、上支下支門（上下の部分があるという観点）であり、第二は、摂取事門（事柄を包括するという観点）である。

80 勒那摩提訳では、「彼諸菩薩十三句功徳二門摂応知」とする。

81 勒那摩提訳では、「何等二門」を欠く。

衆成就　三　摂功徳成就　二　（菩薩功徳成就　一　上支下支門）

【テキスト】(p. 2a, *l.* 29-p. 2b, *l.* 23)

(勒 p. 11c, *l.* 11-p. 12a, *l.* 6)

上支下支門者。所謂総相別相。此義[82]応知。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退転者是総相。余者是別相。彼不退転[83]十種示現。此義応知。何等為十。[84]一者住聞法不退転。如経皆得陀羅尼故。二者楽説不退転。如経大弁才楽説故。三者説不退転。如経転不退転法輪[85]故。四者依止善知識不退転。以身心業依色身摂取故。如経供養無量百千諸仏故。於諸仏所種諸善根故。五者断一切疑不退転。如経常為諸仏之所称歎故。六者為何等何等事説法入彼彼法不退転。如経以大慈悲而修身心故。七者入一切智如実境界不退転。如経善入仏慧故。八者依我空法空不退転。如経通達大智故。九者入如実境界不退転。如経到於彼岸故。十者作所応作[86]不退転。

【書き下し文】

「上支下支門」とは、所謂、総相と別相なり。此の義、応に知るべし。「皆、阿耨多羅三藐三菩提に於て退転せず」とは、是れ総相なり。余は是れ別相なり。彼の「不退転」は、十種もて示現す。此の義、応に知るべし。何等をか十と為すや。

一には、聞法に住する不退転なり。経の如く[88]「皆、陀羅尼を得る」が故なり。

二には、楽説する不退転なり。経の如く[89]「大弁才もて楽説する」が故なり。

三には、説く不退転なり。経の如く[90]「不退転の法輪を転ずる」が故なり。

四には、善知識に依止する不退転なり。身心の業は、色身に依りて摂取するを以ての故に。経の如く[91]「無量百千の諸仏を供養する」が故なり。「諸の仏所に於いて諸の善根を種うる」が故なり。

五には、一切の疑を断ずる不退転なり。経の如く[92]「常に諸仏の称

如経能度無数百千衆生故。[87]

歎する所と為る」が故なり。

六には、何等何等の事の為に説法し、彼の彼の法に入る不退転なり。経の如く[93]「大慈悲を以て身心を修せる」が故なり。

七には、一切智の如実の境界に入る不退転なり。経の如く[94]「善く仏慧に入れる」が故なり。

八には、我の空・法の空に依る不退転なり。経の如く[95]「大智に通達する」が故なり。

九には、如実の境界に入る不退転なり。経の如く[96]「彼岸に到るれ」が故なり。

十には、応に作すべき所を作す不退転なり。経の如く[97]「能く無数百千の衆生を度せる」が故なり。

【現代語訳】

「上支下支門」（上下の部分があるという観点）というのは、つまり総論的な相と各論的な相のことである。このことを知らなければならない。「すべての者は無上なる正しいさとりから退転しない」というのが総合的な様相であり、その他［の語句の表すもの］は個別的な様相である。

その「退転しない」［という語］は十種類に明示されている。このことを知らなければならない。

十とは何か。

第一に、教えを聞くことに止まることから退転しないことである。『[法華]経』に「彼らはみなダーラニーを得ている」とあるように。

第二に、人々に自在に法を説くことから退転しないことである。『[法華]経』に「人々に自在に法を説く弁舌の才を有している」とあるように。

第三に、説示することから退転しないことである。『[法華]経』に「退き後戻りすることのない教えの輪を廻す」とあるように。

第四に、優れた人物に依拠することから退転しないことである。[菩薩の仏に対する供養などといった]身心の業は[仏たちの]物質的な身体に依拠して取り込まれるからである。『[法華]経』に「数え切れない程の数の仏たちを供養して」「それらの仏のみもとで多くの善の根本をつちかい」とあるように。

第五に、すべての疑念を遮断することから退転しないことである。『[法華]経』に「常に仏たちによって讃歎され」とあるように。

第六に、いろいろな事柄のために説法しつつ、それぞれの教えに悟入することから退転しないことである。『[法華]経』に「大いなる慈しみとあわれみをもってその身と心を修め」とあるように。

第七に、すべての事柄を知る智慧という真実の領域（如実境界）に悟入することから退転しないことである。『[法華]経』に「巧みに仏の智慧に入り」とあるように。

第八に、アートマンが空であることと事物が空であることに依拠することから退転しないことである。『[法華]経』に「大いなる智慧に達し」とあるように。

第九に、ありのままの対象に悟入することから退転しないことである。『「法華」経』に「さとりの彼岸に到達し」とあるように。

第十に、行わなければならないことを行うことから退転しないことである。『「法華」経』に「数え切れない程の数の衆生を「彼岸に」渡した」とあるように。

82 勒那摩提訳では、「此義」を欠く。
83 勒那摩提訳では、「有」の字を加える。
84 勒那摩提訳では、「此義応知。何等為十」を欠く。
85 勒那摩提訳では、「転」の字を欠く。
86 勒那摩提訳では、「作所応作」を「応作所作住持」とする。
87 勒那摩提訳では、「数」を「量」とする。
88 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、三行目）にそのままの形で存在する。
89 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、三～四行目）の「楽説弁才」と対応する。
90 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、四行目）にそのままの形で存在する。
91 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、四～五行目）にそのままの形で存在する。
92 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、五～六行目）にそのままの形で存在する。
93 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、六行目）の「以慈修心」と対応する。
94 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、六行目）にそのままの形で存在する。
95 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、六行目）にそのままの形で存在する。
96 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、六～七行目）にそのままの形で存在する。

97 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁上、七～八行目）にそのままの形で存在する。

衆成就　三　摂功徳成就　二　（菩薩功徳成就　二　摂取事門　一）

【テキスト】（p. 2b, *ll.* 16-23）（勒 p. 12a, *ll.* 7-14）

【書き下し文】

摂取事門者。示現諸菩薩住何等清浄地中。以[98]何等方便。於[99]何等境界中。作所応作[100]故。地清浄者。八地已上三地無相行寂静清浄故。方便者有四種。一者摂取妙法方便。住持妙法以楽説力為人説故。二者摂取善知識方便。以依善知識作所応作[101]故。三者摂取衆生方便。以不捨衆生故。四者摂取智方便。以教化衆生令入彼智故。[102]

「摂取事門」とは、諸の菩薩の、何等の清浄の地の中に住し、何等の方便を以て、何等の境界の中に於て、応に作すべき所を作すを示現するが故なり。

地の清浄とは、八地已上の三地の無相行、寂静にして清浄なるが故なり。

方便には、四種有り。一には、妙法を摂取する方便なり。妙法を住持し、楽説力を以て人の為に説くが故なり。二には、善知識を摂取する方便なり。善知識に依りて応に作すべき所を作すを以ての故なり。三には、衆生を摂取する方便なり。衆生を捨てざるを以ての故なり。四には、智を摂取する方便なり。衆生を教化し、彼の智に入らしむるを以ての故なり。

【現代語訳】

「摂取事門」（事柄を包括するという観点）というのは、諸々の菩薩が、いかなる清浄なる地の中に住し、どのような方便を用いて、どのような対象に向かって、作すべきことを作すのかということを示しているからである。

地の清浄とは、第八地以上の三地は、形あるものの出現がなく、寂静であり、そして清らかであるからである。

方便には四種がある。第一に、すぐれた教えを摂め取る方便である。すぐれた教えを自ら保ち、楽説の力によって人々のために［教えを］説くからである。

第二に、優れた人物を摂め取る方便である。優れた人物をよりどころとして、作すべきことを作すからである。

第三に、衆生を摂め取る方便である。衆生を見捨てないからである。

第四に、智を摂め取る方便である。衆生を教化して、彼らを仏智に入らせるからである。

98 勒那摩提訳では、「以」を「因」とする。
99 勒那摩提訳では、「於」の字を欠く。
100 勒那摩提訳では、「作所応作」を「応作所作」とする。
101 勒那摩提訳では、「作所応作」を「応作所作」とする。
102 勒那摩提訳では、「令入彼智故」の後に、「境界者易解」を加える。

【テキスト】(p. 2b, *l.* 24-p. 2c, *l.* 1)

(勒 p. 12a, *ll.* 14-21)

又復更[103]有摂取事門。示現諸地摂取勝功徳不同二乗諸[104]功徳故。謂第八地中無功用智[105]不同下上故。不同下者。下功用行不能動故。不同上者。上無相行不能動自然而行故。第[106]九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在智[107]故。第[108]十地中不退転法輪得受仏位[109]如転輪王之太子[110]故。以得同摂功徳義[111]故。

衆成就　三　摂功徳成就　二　(菩薩功徳成就　二　摂取事門　二)

【現代語訳】

またさらに「摂取事門」(事柄を包括するという観点)がある。諸々の地において、すぐれた功徳を摂め取ることは、二乗(声聞乗と独覚乗)の諸功徳とは異なっていることを示しているからである。

つまり、第八地における無功用智は、下(第六地以下)と上(第七地)とは異なっているからである。下と異なっているというのは、[第六地以]下の功用行は動くことができないからである。上と異なっているというのは、上(第

【書き下し文】

又復た、更に「摂取事門」有り。諸の地に勝功徳を摂取すること、二乗の諸の功徳と同じからざるを示現するが故なり。謂く、第八地の中の無功用智、下上と同じからざるが故なり。下と同じからずとは、下の功用行は、動ずる能わざるが故なり。上と同じからずとは、上の無相行は動ずる能わず、自然にして行ずるが故なり。第九地の中に、勝進陀羅尼門[112]を得、四無礙自在智[113]を具足するが故なり。

第十地の中に、不退の法輪を転じ、仏位を受くるを得ること、転輪王の太子の如きが故なり。同摂の功徳の義を得るを以ての故なり。

七地）の無相行は動くことができず、［しかるに、第八地以上の無相行は］自然に行ずるからである。

そして、第九地の中においてすぐれた陀羅尼門を得て、四無礙自在智を具足するからである。

また、第十地の中において、不退の法輪を転じて仏の位を獲得することは、あたかも転輪王の太子の如くである。

［仏と］同じとして摂めとられる功徳を得るからである。

103 勒那摩提訳では、「又復更」を「復」とする。
104 勒那摩提訳では、「諸」の字を欠く。
105 勒那摩提訳では、「謂第八地中無功用智」を「八地者無功用智」とする。
106 勒那摩提訳では、「第」を「於」とする。
107 勒那摩提訳では、「智」の字を欠く。
108 勒那摩提訳では、「第」の前に「於」の字を加える。
109 勒那摩提訳では、「受仏位」を「仏受位」とする。
110 勒那摩提訳では、「王子」とする。
111 勒那摩提訳では、「義」の字を欠く。
112 四無礙智（catuḥpratisaṃvid のこと。法無礙智（dharmapratisaṃvid）、義無礙智（arthapratisaṃvid）、辞無礙智（niruktipratisaṃvid）、楽説無礙智（pratibhānapratisaṃvid）という、四つの礙げのない智慧を言う。『十地経』では、第九地の菩薩にはこれら四つの智慧が絶えず起こると言い、天親『十地経論』（『大正蔵』第二六巻、一九〇頁上）によれば、それぞれ「法体」「法境界体」「正得与衆生」「正求与無量門」を対象とするという。
113 陀羅尼門（dhāraṇīmukha。陀羅尼（dhāraṇī とは、教えを心にとどめて失わない記憶力のこと。『十地経』（羅什訳：『大正蔵』第十巻、五二六頁上。尸羅達摩訳：『大正蔵』第十巻、五六五頁中）によれば、第九地に至った菩薩は、無量の陀羅尼門を獲得することによって、無量の諸仏のもとで法を聴聞して忘れず、聴聞した通りにさまざまな仕方で説示するという。

【テキスト】(p. 2c, *ll.* 2-8)(勒 p. 12a, *ll.* 21-27)

摂功徳成就者。示現依何処・依何心・依何智・依何等[114]境界行依何等能弁故。依何処者。依善知識故。依何心者。依教化衆生心[115]畢竟利益一切衆生故。依何智者。依三種智。一者授記密智。二者諸通智。三者真実智。依何等境界行・依何等能弁者。即三種智所[116]摂。

【書き下し文】

「摂功徳成就」とは、何れの処に依りて、何れの心に依りて、何れの智に依りて、何等の境界の行に依りて、何等の能弁に依るを示現するが故なり。

「何れの処に依りて」とは、善知識に依るが故なり。

「何れの心に依りて」とは、衆生を教化する心に依りて、畢竟じて一切衆生を利益するが故なり。

「何れの智に依りて」とは、三種の智に依るなり。一には、授記の密智。二には、諸通の智。三には、真実智なり。

「何等の境界の行に依りて、何等の能弁に依りて」とは、即ち、三種の智の所摂なり。

衆成就　三　摂功徳成就　三　(補足)

【現代語訳】

「功徳をあわせているという[特性の]完成」というのは、どの場所に依っているか、どの心に依っているか、どの智に依っているか、どの対象への行に依っているか、どの能弁に依っているか、ということを示しているからである。

「どの場所に依って」というのは、優れた人物に依るからである。

「どの心に依って」というのは、衆生を教化する心に依って、ついにはあらゆる衆生を利益するからである。

「どの智によって」というのは、三種の智に依ることである。第一に授記の密かな智、第二に諸々の神通の智、第三に真実の智である。

「どの対象への行に依って、どの能弁に依って」というのは、つまり三種の智が摂められるところのものである。

114 勒那摩提訳では、「等」の字を欠く。
115 勒那摩提訳では、「依教化衆生心」を「我依衆生心教化」とする。
116 勒那摩提訳では、「所」の字を欠く。

衆成就　四　威儀如法住成就

【テキスト】(p. 2c, *ll.* 8-11)

(勒 p. 12a, *l.* 21-p. 12b, *l.* 1)

応知。威儀如法住成就者[117]。四種示現。何等為四。一者[118]衆囲繞。二者前後。三者供養恭敬。四者尊重讃歎。如経爾時世尊四衆囲繞供養恭敬尊重讃歎故。

【書き下し文】

応に知るべし。「威儀如法住成就」とは、四種もて示現す。何等をか四と為すや。一には、衆囲繞。二には、前後。三には、供養恭敬。四には、尊重讃歎なり。経の如く[119]「爾の時世尊は、四衆に囲繞せられ、供養・恭敬せられ、尊重・讃歎せられし」が故なり。

【現代語訳】

まさに知るべきである。「教えを聞こうとして集まっている大勢の人々の」厳かな振る舞いが法に従って持続しているという「特性の」完成」とは、四種のことによって示されている。四とは何か。

第一に［四］衆の囲繞、第二に前後の［威儀］、第三に供養・恭敬すること、第四に尊重・讃歎すること、である。『［法華］経』に、「その時世尊は、四衆に囲繞されて、供養・恭敬せられ、尊重・讃歎せられ」とあるように。

117 勒那摩提訳では、「有」の字を加える。

118 勒那摩提訳では、「四」の字を加える。

119 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、七行目）にそのままの形で存在する。尚、『法華論』が「威儀如法住成就」の二番目として挙げる「前後」という語は、『妙法華』のこの箇所には見られない。梵文『法華経』には、tena khalu punaḥ samayena bhagavāṃś catasṛbhiḥ parṣadbhiḥ parivṛtaḥ puraskṛtaḥ satkṛto gurukṛto mānitaḥ pūjito'rcito'pacāyitaḥ とあり、「前後」には、梵文の puraskṛtaḥ が対応するかも知れない。

三　如来欲説時至成就

【テキスト】(p. 2c, *l.* 12-p. 3a, *l.* 22)　　【書き下し文】

(勒 p. 12b, *l.* 1-p. 12c, *l.* 7)

如来欲説法時至成就者。為諸菩薩説大乗経故。此大乗修多羅有十七種名。顕示甚深功徳応知。

「如来欲説法時至成就」[27]とは、諸の菩薩の為に大乗の経を説くが[28]故なり。この大乗の修多羅に、十七種の名[29]有り、甚深なる功徳を

何等十七。云何顕示。[1]一名無量義経者。成就字義故。以此法門説彼甚深法妙境界[2]故。彼甚深法妙境界者。諸仏如来最勝境界故。二名最勝修多羅者。於三蔵中最勝妙蔵。此法門中善成就故。[3]三名大方広経者。無量大乗門中善成就故。随順衆生根[4]住持成就故。四名教菩薩法者。[5]以為教化根熟菩薩随順法器善成就[6]故。五名仏所護念者。以依如来[7]有此法故。六名一切諸仏秘密法者。此法甚深唯仏知[8]故。七名一切諸仏之蔵[9]者。如来功徳三昧之蔵在此経故。八名一切諸仏秘[10]密処者。以根未熟衆生等非受法器不授与[11]故。九名能生一切諸仏経[12]者。聞此法門能成諸仏大菩提[13]故。十名一切諸仏之[14]道場者。以[15]此法門能成諸仏[16]阿耨多羅三藐三菩提非余修多羅故。十一名一切諸仏所転法輪者。[17]以此法門能破一切諸障礙[18]故。十二名一切諸仏堅固舎利者。謂如来真実[19]法身於此修多羅不敗[20]壊故。

顕示す。応に知るべし。何等をか十七なる。云何が顕示せんや。

一に、「無量義経」[30]と名づくるは、字義を成就するが故なり。此の法門を以て、彼の甚深なる法の妙なる境界を説くが故なり。彼の甚深なる法の妙なる境界とは、諸の仏・如来の最勝の境界なるが故なり。

二に、「最勝修多羅」[31]と名づくるは、三蔵中に於いて最勝の妙蔵、此の法門中に善く成就するが故なり。

三に、「大方広経」[32]と名づくるは、無量の大乗の門、衆生の根に随順して住持するを成就するが故なり。[33]

四に、「菩薩に教うる法」[34]と名づくるは、根熟の菩薩を教化せんがために、法器に随順して善く成就するを以ての故なり。[35]

五に、「仏の護念する所」[36]と名づくるは、如来に依りて此の法有るを以ての故なり。

六に、「一切諸仏秘密の法」と名づくるは、此の法、甚深にして、唯だ、仏のみ知るが故なり。

七に、「一切諸仏の蔵」[37]と名づくるは、如来功徳と三昧の蔵、此の経に在るが故なり。[38]

十三名一切諸仏大巧方便経者。依此法門成大菩提已為衆生説天人声聞辟支仏等諸善[21]法故。十四名説一乗経者。以[22]此法門顕示如来阿耨多羅三藐三菩提究竟之体。彼[23]二乗道[24]非究竟故。十五名第一義住者。以[25]此法門即是諸仏[26]如来法身究竟住処故。

八に、「一切諸仏の秘密処」と名づくるは、根の未熟なる衆生等、受法器に非ず、授与せざるを以ての故なり。

九に、「能く一切諸仏を生ずる経」と名づくるは、此の法門を聞きて、能く諸仏の大菩提を成ずるが故なり。

十に、「一切諸仏之道場」と名づくるは、此の法門もて、能く諸仏の阿耨多羅三藐三菩提を成じ、余の修多羅に非ざるを以ての故なり。

十一に、「一切諸仏の所転の法輪」と名づくるは、此の法門もて、能く一切の諸障礙を破するを以ての故なり。

十二に、「一切諸仏の堅固なる舎利[39]」と名づくるは、謂わく、如来の真実の法身、此の修多羅に於いて敗壊せざるが故なり。

十三に、「一切諸仏の大巧方便経」と名づくるは、此の法門に依りて大菩提を成じ已わりて、衆生の為に天・人・声聞・辟支仏[40]等の諸善法[41]を説くが故なり。

十四に、「一乗を説く経」と名づくるは、此の法門は、如来の阿耨多羅三藐三菩提の究竟の体を顕示し、彼の二乗の道[42]、究竟に非ざるを以ての故なり。

十五に、「第一義の住」と名づくるは、此の法門、即ち、是れ諸

十六名妙法蓮華経[43]者。有二種義。何等二種。一者出水義。以[44]不可尽出離小乗泥濁水故。又[45]復有義。如彼蓮華出於[47]泥水喩。諸声聞得[48]入如来大衆中坐。如諸菩薩坐蓮華上。聞説如来[49]無上智慧清浄境界。得[50]証如来深[51]密蔵故。二華開義。以諸衆生於大乗中其心怯弱不能生信。是故開示諸仏如来浄妙法身[52]令生信心故。十七名最上[53]法門者。摂成就故。摂成就者。摂取無量名句字身。有[54]頻婆羅阿男婆等舒盧迦[55]故。是十七句法門[56]是総。余句是別[57]。如経為諸菩薩説大乗経名無量義如是等故[58]。

の仏・如来の法身の、究竟の住処なるを以ての故なり。

十六に、「妙法蓮華経」と名づくるは、二種の義有り。何等をか二種なる。

一には、出水の義なり。不可尽なるを以て小乗の泥濁水を出離するが故なり。又復た義有り。彼の蓮華の泥水より出るが如きは、諸の声聞の、如来の大衆中に入るを得て坐するに喩う。諸の菩薩の如きは、蓮華上に坐し、如来の無上智慧と清浄境界とを説くを聞きて、如来の深密蔵を証するを得るが故なり。

二には、華開の義なり。諸の衆生の、大乗中に於いて、其の心怯弱にして、信を生ずること能わざるを以て、是の故に、諸の仏・如来の浄妙法身を開示して、信心を生ぜしむるが故なり。

十七に、「最上法門」と名づくるは、摂成就の故なり。摂成就とは、無量の名句字身を摂取す。頻婆羅[59]阿閦婆[60]等の舒盧迦[61]の有るが故に。

此の十七句法門は、是れ総なり。余句は、是れ別なり。経の如く[62]「諸の菩薩の為に大乗経の無量義と名づくるを説く」、是くの如き等の故なり。

【現代語訳】

「如来が法を説こうとする時が来ているという［特性の］完成」というのは、諸々の菩薩の為に大乗の経を説く［と『法華経』に説かれている］からである。この大乗のスートラには、十七種類の名があって、甚深な功徳を顕示している。［このことを］まさに知らなければならない。十七とは何か。どの様に顕示しているのか。

第一に、「無量義経」という名であるのは、字という意義を完成しているからである。この法門（『法華経』）によって、きわめて奥深い法のすぐれた境界が説かれているからである。きわめて奥深い法のすぐれた境界とは、諸仏、如来の最もすぐれた境界のことである。

第二に、「最もすぐれたスートラ」という名であるのは、三蔵の中で最もすぐれて見事な［教えの］蔵が、この法門（『法華経』）の中で善く完成しているからである。

第三に、「大方広の経」という名であるのは、無量なる大乗の門は、衆生の機根ふさわしいように従って、失わないように止まって完成しているからである。

第四に、「菩薩を教誡する法」という名であるのは、［『法華経』が、］機根が熟している菩薩を教化するために、法を受容する器に応じたことを善く完成しているからである。

第五に、「仏に護り念われるもの」という名であるのは、如来に依拠してこの法が存在するからである。

第六に、「一切諸仏の秘密の法」という名であるのは、この法は甚深であって、ただ仏だけが知っているからである。

第七に、「一切諸仏の蔵」という名であるのは、如来の優れた特性と三昧の蔵が、この経の中に存在しているからである。

第八に、「一切諸仏の秘密の場所」という名であるのは、機根が未だに熟していない衆生等は、法を受容する器ではないので、［『法華経』を］授与しないからである。

第九に、「能く一切諸仏を生じる経」という名であるのは、この法門（『法華経』）を聞いて、諸仏の大いなるさとりを成ずることができるからである。

第十に、「一切諸仏の道場」という名であるのは、この法門（『法華経』）は、諸仏としての無上の正しいさとりを完成させ、別余の経典は、そうではないからである。

第十一に、「一切諸仏が転じられた法輪」という名であるのは、この法門（『法華経』）は、すべて、諸のさとりの障害となるものを打ち破るからである。

第十二に、「一切諸仏の堅固なる舎利」という名であるのは、如来の真実の法身がこの経典において、毀われることがないからである。

第十三に、「一切諸仏の大いに巧みな方便の経」という名であるのは、［諸仏は］この法門に依拠して、大いなるさとりを成し遂げて、衆生の為に、天と人と声聞、辟支仏等の諸の善法を説くからである。

第十四に、「説一乗経」という名であるのは、この法門は、如来の無上の正しいさとりという究極のそのもの自体を顕示しているが、それに対し、彼の二乗（声聞乗と独覚乗）のさとりは究極のものではないからである。

第十五に、「第一義の住」という名であるのは、この法門が、そのまま諸仏、如来の法身の究極の住処であるからである。

第十六に、「妙法蓮華経」という名であるのには、二種の意味がある。二種とは何か。第一には、水から出るという意味である。［仏の教えは］尽くすことができないということによって、小乗という濁った泥水から離れ出る、という

理由による。別の意味もある。蓮華が泥水から出てくるというのは、声聞たちが、如来の大勢の聴衆たちの中に入ることができて、坐ることに喩えるのである。菩薩たちは蓮華の上に坐り、如来が無上なる智慧・清浄なる境界を説き明かすのを聞き、如来の奥深い秘密の教えの蔵をさとる、という理由による。

第二には、蓮華が開くという意味である。衆生たちは、大乗の中にあっても心が弱く、信の心を生み出すことができない。それで、諸仏、如来の浄らかで妙なる法身を開示して、信の心を生じさせるという理由による。

第十七に、「最上法門」という名であるのは、摂成就であるからである。「摂成就」とは、量りしれないほどの、語・文・文字の集まりを取り摂めることである。十の十七乗、十の十九乗といった数多くの偈頌があるからである。

このような十七の句の法門は、総論的なものであり、これ以外の句の法門は、各論的なものである。『「法華」経』に「諸菩薩のために大乗の無量義と名づける経を説く」と、このようにあるように。

1 勒那摩提訳では、「何等十七。云何顕示」を欠く。
2 勒那摩提訳では、「法妙境界」を「妙境界法」とする。次の、「彼甚深法妙境界者」も同様に、「甚深妙境界法者」とする。
3 勒那摩提訳では、「於三蔵中最勝妙蔵。此法門中善成就故」を、「三蔵中最妙勝蔵成就故」とする。
4 勒那摩提訳では、「無量大乗門中善成就故。随順衆生根」を「無量大乗門随衆生根」とする。
5 勒那摩提訳では、「以」の字を欠く。
6 勒那摩提訳では、「随順法器善成就」を「随器法成就」とする。
7 勒那摩提訳では、「以依如来」を「依仏如来」とする。
8 勒那摩提訳では、「唯仏知」を「如来知」とする。
9 勒那摩提訳では、「諸仏之蔵」を「仏蔵」とする。

10 勒那摩提訳では、「秘」の字を欠く。
11 勒那摩提訳では、「以根未熟衆生等非受法器不授与故」を「根未熟衆生非法器不与故」とする。
12 勒那摩提訳では、「経」の字を欠く。
13 勒那摩提訳では、「諸仏大菩提」を「仏菩提」という。
14 勒那摩提訳では、「之」の字を欠く。
15 勒那摩提訳では、「以」を「聞」とする。
16 勒那摩提訳では、「諸仏」を欠く。
17 勒那摩提訳では、「以」を欠く。
18 勒那摩提訳では、「礙」の字を欠く。
19 勒那摩提訳では、「実」を「如」とする。
20 勒那摩提訳では、「敗」の字を欠く。
21 勒那摩提訳では、「諸善」を欠く。
22 勒那摩提訳では、「以」の字を欠く。
23 勒那摩提訳では、「彼」の字を欠く。
24 勒那摩提訳では、「道」の字を欠く。
25 勒那摩提訳では、「以」の字を欠く。
26 勒那摩提訳では、「諸仏」を欠く。
27 七種功徳成就中の三番目である。(『妙法蓮華経憂波提舎』、『大正蔵』第二六巻、一頁中、二行目)
28 『妙法華』(『大正蔵』第九巻、二頁中、八行目)
29 十七の名については、本田義英『法華経論』(昭和十九年)八七～九六頁参照。
30 同(二頁中、八行目)、又、蕭斉の曇摩伽陀耶舎訳『無量義経』(『大正蔵』第九巻、三八三頁以下)がある。尚、梵本には mahānirdeśaṃ nāma dharmaparyāyaṃとある。(KN. p. 5, l. 8)

31 『妙法華』には見られないが、梵本には sūtrāntaṃとある。(KN. p. 5, l. 8)

32 『妙法華』には見られないが、梵本には mahāvaipulyaṃとある。(KN. p. 5, l. 8)

33 底本では、「無量大乗法門中善成就故。随順衆生根住持成就故」と「中善成就故」という句があるが、勒那摩提訳では、「無量大乗法門随順衆生根住持成就故」(『大正蔵』第二六巻、十二頁中、八行目)であり、また吉蔵の疏中の法華論の引用文も、「無量大乗法門随順衆生根住持成就故」(『大正蔵』第四〇巻、七九三頁上、十七行目)であって、「中善成就故」という句を欠く。ここでは、勒那摩提等に従って「中善成就故」の句を削除する。

34 『妙法華』(『大正蔵』第九巻、二頁中、八行目)。梵本には bodhisattvāvavādaṃとある。(KN. p. 5, l. 9)

35 「随順法器善成就故」を勒那摩提訳では「随器法成就故」とする。(『大正蔵』第二六巻、十二頁中、九行目)

36 『妙法華』(『大正蔵』第九巻、二頁中、八行目)。梵本には sarvabuddhaparigrahaṃとある。(KN. p. 5, l. 9)

37 『妙法華』「安楽行品」には、「此法華経諸仏如来秘密之蔵」(『大正蔵』第九巻、三九頁上)とある。30 同(二頁中、八行目)、又、蕭斉の曇摩伽陀耶舎訳『無量義経』(『大正蔵』第九巻、三八三頁以下)がある。尚、梵本には mahānirdeśaṃ nāma dharmaparyāyaṃとある。(KN. p. 5, l. 8)

38 『妙法華』神力品(『大正蔵』第九巻、五二頁上)には次のようにある。「如来一切所有之法。如来一切自在神力。如来一切秘要之蔵。如来一切甚深之事。皆於此経宣示顕説」

39 「舎利」(身骨)には二種類あると言われる。生身の舎利を、いずれ壊れるという意味で「砕身」といい、法身の舎利を、完全な身体と言う意味で「全身」という。この箇所では、後者の舎利を指して述べている。

40 「辟支仏」とは、独覚あるいは縁覚、pratyekabuddha のことを指す。

41 声聞、縁覚、菩薩の三乗に人乗、天乗を加えて五乗という。天乗、人乗は世間乗、それ以外の三乗は出世間乗という。

42 「一乗道」とは、最高のさとりである阿耨多羅三藐三菩提に対し、他の声聞、縁覚のさとりを指す。なお、道とはさとり、あるいはさとりへの道、教え、の意味。

43 勒那摩提訳では、「経」の字を欠く。

44 勒那摩提訳では、「以」の字を欠く。

45 勒那摩提訳では、「又」の字を欠く。
46 勒那摩提訳では、「如彼」を欠く。
47 勒那摩提訳では、「於」の字を欠く。
48 勒那摩提訳では、「得」の字を欠く。
49 勒那摩提訳では、「如来」を欠く。
50 勒那摩提訳では、「得」の字を欠く。
51 勒那摩提訳では、「深」の字を欠く。
52 勒那摩提訳では、「二華開義。以諸衆生於大乗中其心怯弱不能生信。是故開示諸仏如来浄妙法身」を、「二華開者。諸衆於大乗中心怯弱不能生信故。開示諸仏如来浄妙法身」とする。
53 勒那摩提訳では、「最上」を欠く。
54 勒那摩提訳では、「有」の字を欠く。
55 勒那摩提訳では、「舒盧迦」を「偈」とする。
56 勒那摩提訳では、「法門」の後に「者」の字を加える。
57 勒那摩提訳では、「別」の後に「故」の字を加える。
58 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。
59 visvara の音写で、十の十七乗という桁の名称
60 akṣabhya の音写で、十の十九乗という桁の名称
61 śloka の音写語。また、『妙法華』薬王菩薩本事品に「復聞是法華経。八百千万億那由他。甄迦羅頻婆羅阿男婆等偈」とある。（『大正蔵』第九巻、五三頁中）
62 『妙法華』序品（『大正蔵』第九巻、二頁中、七～八行目）にそのままの形で存在する。

四　依所説法威儀随順住成就

【テキスト】(p. 3a, *l.* 23-p. 3b, *l.* 5)（勒 p. 12c, *ll.* 7-17)

依所説法威儀随順住成就[1]者。示現依何等[2]何等法説法。依三種法故。一者依三昧成就。三昧成就二種示現[3]。一者成就自在力。身心不動故。二者離一切障[4]。随自在力故。此自在力復有[5]二種。一[6]為随順衆生不見[7]対治摂取覚菩提分法故。二[8]為対治無量世来堅執煩悩故。如経仏説[9]此経已結加趺[10]坐。入於無量義処三昧身心不動[11]。如是等故。二者依器世間。三者依衆生世間[12]。震[13]動世界及知過去無量劫事。如是[14]等故。如経是時天雨曼荼羅花[15]次第[16]乃至歓喜合掌一心観仏故。[17]

【書き下し文】

「依所説法威儀随順住成就」とは、何等何等の法に依りて法を説くを示現するや。三種の法に依るが故なり。一には、三昧成就に依る。三昧成就は二種もて示現す。一には、自在なる力を成就す。身心の動ぜざるが故なり。二には、一切の障を離る。自在なる力に随うが故なり。此の自在なる力に復た二種有り。一には、衆生に随順し対治を見ず覚菩提分法[18]を摂取せしめんが為の故なり。[19]二には、無量の世より来り、堅く執せる煩悩を対治するが為の故なり。

経の如く[20]「仏は此の経を説き已って結跏趺坐したもう。無量義処三昧に入りて身心動じたまわず」、是くの如き等の故なり。二には、器世間に依る。三には、衆生世間に依る。世界を震動し、[21]及び過去の無量なる劫の事を知る。[22]是くの如き等の故なり。経の如く[23]「是の時天は曼陀羅花を雨し」次第して乃至「歓喜し合掌し一心に仏を観たてまつる」が故なり。

【現代語訳】

「依拠して教えを説き、厳かな振る舞いに準拠して維持しているという［特性の］完成」というのは、いくつの、どのような事柄に依拠して教えを示したと表しているのか。

三種のこと（法）に依拠してである。

第一に、三昧の完成に依拠してである。三昧の完成は二種類のことによって示されている。一には、自在な力を完成している。身心が動揺しないからである。二には、すべての障害を離れている。自在な力に従っているからである。この自在な力にも二種類がある。一には、衆生に応じて［煩悩を］滅することのないまま、さとりを知るための補助となる事柄を摂め取らせるからであり、二には、量ることもできないほど［前の］世から堅固に付着している煩悩を滅するからである。

『「法華」経』に「仏はこの経を説かれた後に結跏趺坐され、無量義処三昧に入られて身心は動じられなかった。」と、このようにあるとおり。

［三種のことの］第二に、環境世界に依拠し、第三に、衆生世界に依拠してである。世界を震動することと、過去の量りきれないほどの［数の］劫の［間の］出来事を認識することとである、このようにあるとおり。『「法華」経』に「この時に神は曼陀羅花や……を雨のように降らせて」から「喜び合掌し一心に仏を観たてまつった」とまでにあるように。

1 勒那摩提訳には「所依説法随順威儀住成就者」とある。
2 勒那摩提訳では、「何等」を欠く。
3 勒那摩提訳では、「一者依三昧成就。三昧成就二種示現。」を「一依三昧成就故。以三昧成就二種示現。何等為二」とする。
4 勒那摩提訳では、「諸障」とする。
5 勒那摩提訳では、「復」の字を欠く。
6 勒那摩提訳では、「一者」とする。
7 勒那摩提訳では、「不見」を欠く。
8 勒那摩提訳では、「二者」とする。
9 勒那摩提訳では、「仏」の字を欠く。
10 勒那摩提訳では、「加」を「踟」とする。
11 勒那摩提訳では、「身心不動。如是」を欠く。
12 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。
13 勒那摩提訳では、「者」の字を欠く。
14 勒那摩提訳では、「者」の字を欠く。
15 勒那摩提訳では、「如是」を欠く。
16 勒那摩提訳では、「花」を「華」とする。
17 勒那摩提訳では、「乃至」を欠く。
18 「覚菩提分法」　吉蔵の疏によれば、「覚菩提」とは無上遍知道のことであり、「分」の字義について、「正に無上菩提に因て二乗を桓じ、余の法を用いず。故に称して分と為す。大乗の道品は七覚分、八聖道分なり。今七覚を歎じて之を桓ず」、「分の言、因なり。因即ち是れ二乗の菩提なり」（『大正蔵』第四十巻、七九四頁下、一二行目以下）と解釈する。
19 以上の一文は、勒那摩提訳には「一者為随順衆生示現対治摂取覚菩提分法故」（『大正蔵』第二十六巻、一二頁下、一二行目）とある。吉蔵の疏では、まず菩提流支訳の「不見對治」がテキストとして提示され（『大正蔵』第四十巻、七九四頁中、二九行目以下）、勒那

摩提訳の「示現対治」について解釈されている（同、第四十巻、七九四頁下、一七行目以下）。

20 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、九行目）にそのままの形で存在する。

21 『妙法華』序品では「普仏世界六種震動。」（『大正蔵』第九巻、二頁中、一二行目）が示唆された箇所であろうか。吉蔵の疏によれば、この部分は「依器世間」の根拠にあたる（『大正蔵』第四十巻、七九五頁下、一七行目以下）。

22 勒那摩提訳には「知過去無量劫事」のあとの「如是」を欠く（『大正蔵』第二十六巻、一二頁下、一六行目）。吉蔵の疏によれば、この部分は「依衆生世間」の根拠にあたり、「釈依衆生世間。過去無量劫仏説法華。時数盛天雨四華大衆歓喜。今亦如是。」と述べて、（一）大衆が歓喜し、（二）天が衆生であるから当てはまるという（『大正蔵』第四十巻、七九五頁下、二〇行目以下）。

23 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、一〇～一六行目）に、そのままの形で存在する。

五　依止説因成就

【テキスト】(p. 3b, *ll.* 6-22)

(勒 p. 12c, *l.* 18-p. 13a, 14)

依止説因成就者。為諸大衆示現異相不思議事。[24]大衆見已生希有心。渇仰欲聞生如是念。[26]如来今者応為我説。[27]故名依止説因成就。是故如来[29]放大光明。示現他方[30]諸世界中種種諸事[31]故。先為大衆[32]示現外事六種震動等。次為示現此法門中内証甚深微密之法。[33]又依器世間衆生世間

【書き下し文】

「依止説因成就」とは、諸の大衆の為に異相不思議の事を示現す。大衆見終わり、希有の心を生ず。渇仰して聞かんと欲し、是くの如きの念を生ず。「如来は今、応に我が為に説くべし」と。故に「依止説因成就」と名づく。是の故に如来は大光明を放ち、他方の諸の世界中の種種の諸事を示現するが故なり。

先ず、大衆の為に外事の六種の震動等[38]を示現す。次に、此の法門

数種種量種種具足煩悩差別具足清浄差別仏法弟子差別。示現三宝故。復乗差別。有世界有仏。

有世界無仏。令衆生見修行者未得果得道者已得果。如経諸修行得道者故。数種種者示現種種観故。略説四種観。一者食。二者聞法。三者[34]修行。四者楽。如経爾時仏放眉間白毫相光。次第[35]乃至以仏舎利起七宝塔故。行菩薩道者。教化衆生依四摂法方便摂取。此義[36]応知。如経所説当自推取。[37]

中に内証・甚深・微密の法を示現するを為す。又、器世間・衆生世間の数に種種あり、量に種種あり、煩悩を具足するの差別あり、清浄を具足するの差別あり、仏と法と弟子[39]の差別あるに依りて三宝を示現するが故なり。[40]

復た、乗に差別[41]あり。世界有りて仏有り。世界有りて仏無し。[42]衆生をして、修行者の未だ果を得ず、得道者の已に果を得ること[43]を見せしむ。経の如く[44]「諸の修行得道者」の故なり。

「数に種種あり」とは、種種の観を示現するが故なり。略して四種の観を説く。一には食。[45]二には聞法。三には修行。四には楽[46]なり。経の如く[47]「爾の時仏は、眉間の白豪相[48]の光を放つ」次第して乃至「仏舎利[49]を以て七宝塔[50]を起つる」が故なり。

「菩薩道を行ずる」[51]とは、衆生を教化し、四摂法[52]に依って方便もて摂取するなり。此の義、応に知るべし。経の如し。所説、当に自ら推取すべし。

【現代語訳】

「法を説く原因が［衆生に］依っているという［特性の］完成」というのは、［次のような理由による。すなわち］多くの人々の為に、［仏が］異なった様相、我々の思惟を越えた光景を示しだしており、人々が見終わって希有な思い

を生じた。そして、[仏を]仰ぎ慕って[法]を聞きたいと望んで、次のような考えが生じた。「如来は今、私のために[法を]お説きになるであろう」と。それ故に、「法を説く原因が[衆生に]依っていることが完成している」と言われるのである。[なぜなら]そのような理由(民衆が法を聞きたいと望んだこと)で、如来は大いなる光明を放ち、他の方角の多くの世界の中の様々な事柄を示すからである。先ず、人々のために外面的には六種類の震動などを示す。次に、この法門『法華経』の中に仏の内面的なさとりである、非常に奥深く、感覚ではとらえられない、微妙な法を示す。

環境世界と衆生世界については数も様々であり量も様々であり、[衆生の]煩悩が多いか少ないかの区別もあり、清浄さの程度の区別もあり、仏と法と弟子とにも[それぞれ]区別があるということによって三宝を示しているからである。また、乗(大乗と小乗)の区別がある。仏のいる世界と仏のいない世界がある[という区別がある]。

修行者がまた結果を得ていないことと得道者がすでに結果を得ていることを[仏が]衆生に見させるのである。『[法華]経』において「修行して得道する者」とあるように。

「数が様々であること」(数種種)というのは、種々なる観察を示すからである。要約して四種類の観察を説こう。一には「食」、二つには「聞法」、三には「修行」、四には「楽」である。『[法華]経』において「その時仏は、眉間にある白い巻き毛から一条の光を放って」から「仏の遺骨をおさめるための七宝づくりの塔が起てられるのが見えた」とまでにあるように。

「菩薩の道を行ずる」とは、衆生を教化して、四つの摂法によってそれらを手段として[衆生]を摂め取ることである。このことを知らなければならない。経の通りである。説こうとする意味は、自ら推し量って理解されなければな

らない。

24 勒那摩提訳では、「為諸大衆示現異相不思議事」を、「彼諸大衆現見異相不可思議事」とする。
25 勒那摩提訳では、「大衆見已生希有心」を欠く。
26 勒那摩提訳では、「如是念」を「希有心」とする。
27 勒那摩提訳では、「今者」を欠く。
28 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。
29 勒那摩提訳では、「如来」を欠く。
30 勒那摩提訳では、「他方」を欠く。
31 勒那摩提訳では、「諸」の字を欠く。
32 勒那摩提訳では、「為大衆」を欠く。
33 勒那摩提訳では、「次為示現此法門中内証甚深微密之法。」を「次示現此法門内証甚密法故。」とする。
34 勒那摩提訳では、「明」の字を加える。
35 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。
36 勒那摩提訳では、「此義」を欠く。
37 勒那摩提訳では、「如経中当推取」とする。
38 六変震動、又六反震動とも言う。東西南北と上下に六通りに震動すること。大神変の一つで仏の偉大な説法が説かれるときに起こる瑞相の一種。
39 『妙法華』には、「又見彼土現在諸佛。及聞佛所説經法。并見彼諸比丘比丘尼優波塞優婆夷譜修行得道者。復見譜菩薩摩訶薩種種因縁種種信解種種相貌行菩薩道。」(『大正蔵』第九巻二頁中、十九～二三行目)とある。
40 吉蔵(『大正蔵』第四〇巻、七九五頁下)では、「仏法弟子差別示現三宝故者」とあり、「示現三宝」は「仏法弟子差別」にかかってい

るが、ここでは「又依器世間～仏法弟子差別」すべてにかかっていると解す。

41 ここでは、大乗と小乗の区別をたてること。吉蔵には「復乗差別者。四果為小乗、菩薩為大乗」（『大正蔵』第四十巻、七九五頁下、十行目）とある。小乗とは『妙法華』の「比丘比丘尼優婆塞優婆夷」（『大正蔵』第九巻、二頁中、二十行目）大乗とは『妙法華』の「菩薩摩訶薩」（『大正蔵』第九巻、二頁中、二一行目）を指すと思われる。

42 「世界有りて仏有り」～これについては、吉蔵に「東方世界現在仏為仏」（『大正蔵』第四〇巻、七九五頁下、十二行目）、『妙法華』には「又見彼土現在仏諸仏」（『大正蔵』第九巻、二頁中、十九行目）とある。

又、「世界有りて仏無し」～これについては、吉蔵に「又、見諸仏般涅槃後以仏舎利起七宝塔名為無仏」（『大正蔵』第四十巻、七九五頁下、十二行目）、『妙法華』には「復見諸仏涅槃者。復見諸仏般涅槃後以仏舎利起七宝塔。」（『大正蔵』第九巻、二頁中、二十三行目）とある。

43 「修行者未だ果を得ず、得道者すでに果を得ること」～吉蔵において「四衆修行也。未得果者修三学行未得四果。得道者已得四果」（『大正蔵』第四〇巻、七九五頁下、十七行目）とある。

44 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、二一行目）にそのままの形で存在する。『妙法華』においては、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷が「修行得道者」であるという。

45 身心を増長増益するもののこと。吉蔵（『大正蔵』第四〇巻、七九五頁下、二十七行目）には、「一者食亦可是禅悦為食。亦可是揣等四食。」とある。即ち、「禅三昧を食とすること。」である。又、四食のうちの「揣」とは「段」「摶」とも言われる。四食とは、段食（肉体を養う食物）、触食（感覚のこと、身体生命を養育するので食という）、思食（意志作用のこと、思想、希望によって身体を保持するもの）、識食（六識のこと）である。

46 修行の結果得られる安楽。

47 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、十六～二四行目）にそのままの形で存在する。

48 仏に備わる三十二相の一つ。仏陀の眉間にある右回りに渦をなしている白い毛。

49 仏の遺骸、遺骨のこと。

50 仏陀の遺骨を祀った塔のこと。七種類の宝玉よりつくられたもの。

51 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、二二行目）にそのままの形で存在する。

52 四摂法～人々を収め取る四の方法。布施、愛語、利行、同事。

六　大衆欲聞法現前成就

【テキスト】(p. 3b, *l.* 23-p. 3c, *l.* 16)

(勒 p. 13a, *l.* 15-p. 13b, *l.* 5)

自此以下。示現大衆欲聞現前成就。[1]問一人者[2]多人欲聞生希有心。是故唯問文殊師利。如是示現世尊弟子随順於[3]法不相違故。今仏世尊現神変相者為何等義。為説大法故。現大相以為説因。現大相者。為説妙法蓮華経故現大瑞相。為説如来[4]所得妙法不可思議等文字章句[5]故。

有二種義。

是故仰推文殊師利。[9]何等為二。[10]一者現見諸

【書き下し文】

此れ自り以下は、[6]「大衆欲聞現前成就」[7]を示現す。

一人に問うとは、多人、聞かんと欲し、希有の心を生ず。是の故に、唯だ、文殊師利にのみ問う。是の如く、世尊の弟子にして、法に随順し相違せざるを示現するが故なり。

「今、仏世尊は、神変の相を現じたもう」[8]とは、何等の義と為すや。大法を説く為の故なり。大なる相を現じ、以て説くことの因と為す。大なる相を現ずとは、妙法蓮華経を説かんが為の故に、大なる瑞相を現ずるなり。如来所得の妙法、不可思議等の文字・章句を説かんが為の故なり。

二種の義有りて、是の故に仰ぎて文殊師利を推す。何等をか二と為す。一には、諸法を現見するが故なり、二には、諸の因縁を離れ、[19]

法故。[11] 二者離諸因縁唯自内心[12]成就彼法故。示現種種諸[13]瑞相者。以為示現彼彼事故。如彼事相現没住滅応当善知。[14]以文殊師利能記彼事故。以文殊師利所作成就因果成就現見彼法故。所作成就者。此有二種。[15] 一者功徳成就二者智慧成就。因成就者。一切智成就故。[16] 又復有因謂縁因故。縁因成就者。衆相具足故。果成就[17]者。説大法故。[18]

種種異異[25]仏国土者。為此[26]示現彼国土中種種異異[27]差別応知。浄妙国土者。謂[28]無煩悩衆生住処。[29] 如経照於東方万八千世界次第[30]乃至悉見彼仏国界荘厳故。如来為上首者。諸菩薩等依如来住故。以彼[31]如来於彼国土諸[32]大衆中得自在故。如経又見彼土現在諸仏如是等故。

唯だ、内心自り彼の法を成就せるが故なり。「種種なる諸の瑞相を示現す」[20]とは、彼彼の事を示現せんが為を以ての故なり。[21]彼の事の相の現・没・住・滅の如し。[22]応に善く知るべし。文殊師利の能く彼の事を記するを以ての故に。文殊師利の所作は成就し、因果は成就し、彼の法を現見するを以ての故なり。「所作成就」とは、此れに二種有り。一には、功徳成就、二には、智慧成就なり。「因成就」とは、一切智の成就の故なり。又復た、因有り。謂く、縁因の故なり。[23] 縁因成就とは、衆相具足の故なり。[24]「果成就」とは、大なる法を説くが故なり。

「種種異なる仏国土」[33]とは、此れ、彼の国土中の種種異異なる差別を示現せんが為なり。応に知るべし。「浄妙なる国土」[34]とは、謂く、煩悩無き衆生の住処り。経の如く[35]「東方八千世界を照らしたもう」次第して乃至「悉く彼の仏国界の荘厳なるを見る」が故なり。「如来もて上首と為す」[36]とは、諸の菩薩等、如来に依りて住するが故なり。彼の如来、彼の国土の諸の大衆の中に於いて自在を得るを以ての故なり。経の如く[37]「又、彼の土の現在の諸仏を見る」、是くの如き等の故なり。

【現代語訳】

これより以下は、「法を聞きたいという望みが大衆に現れているという［特性の］完成」を示している。

一人に問うとは、［次のような理由である。すなわち］多くのものたちが［仏の現された不思議なるさまの因縁を］聞きたいと望み、希有なる思いを生じた。この故に［弥勒菩薩が］文殊師利ただ一人に問うたのである。このように、［文殊師利は］世尊の弟子であり、法にしたがい、違うことがない、ということを示しているからである。

［『法華経』中に］「今、仏世尊は、不思議な奇蹟のさまをお映しになられた」とあるのは、いかなる意義か。［それは］大いなる法を説くためである。大いなる［不思議な奇蹟の］さまを現し出し、それを［法を］説くよすがとしたのである。つまり、「大いなるさまを現し出した」［と言う］のは、『妙法蓮華経』を説くために、大いなるめでたいさまを現し出したということである。［『法華経』に示される］如来が獲得しているすぐれた法、不可思議［なる法］等としての文字、章句を説くためである。

二つの意義があり、そのために［弥勒菩薩他、多くのものたちは］仰ぎ見て、文殊師利を選んだのであるが、その二つ［の意義］とは何か。一つめは、［彼が］諸法（ことがら）をはっきりと知るからであり、二つめは、諸々の因縁を離れて、ただ心の内からその法（ことがら）を完成しているからである。「種種諸々のめでたいしるしを示す」とは、彼彼の事（つまり過去諸仏の諸瑞相）を示すためである。それは、その事相の、現れ、変化し、とどまり、滅するといった様相などのようなものである。まさによく知るべきである。文殊師利は、彼の事（過去諸々の諸瑞相）というものをはっきりと説くことができるからである。

また、文殊師利は、作すべきことの完成と因果の完成とによって諸法をはっきりと知るからである。「なすべきこと

の完成」には二つある。一つめは功徳の完成、二つめは智慧の完成である。[「因果の完成」のうち]「因の完成」というのは、一切智を完成していることに基づいている。またさらに因がある。いわば間接的な因である。間接的な「因の完成」というのは、衆相（つまり、さまざまなめでたい前兆）をそなえているからである。「果の完成」というのは、[一切智、衆相の果としての]大いなる法（ことがら）を説くからである。

[『法華経』中の]「種種さまざまなる仏国土」とは、その国土には種種さまざまな区別があることを示すためである。[このことを]知らなければならない。「浄妙なる国土」とは、煩悩なき衆生の住むところである。『[法華]経』において「東方の一万八千の国土が照らされると」から「その仏国土の領域の厳かなありさまがことごとく見られた」とまでにあるように。「如来をもっともすぐれたものとしている[国土]」というのは、[そこにおいては]諸々の菩薩たちが如来をよりどころとしてとどまっているからである。[また]そのような如来は、かの国土の諸々の人々の中にあって、自在なる力を獲得しているからである。『[法華]経』において「また、かの国土におられる仏たちが見られ」とあるように。

1 勒那摩提訳では、「自此以下示現大衆。現前欲聞法成就」とある。
2 勒那摩提訳では、「者」の字を欠く。
3 勒那摩提訳では、「於」の字を欠く。
4 勒那摩提訳では、「如来」を欠く。
5 勒那摩提訳では、「文字章句」を「文句」とする。
6 すなわち、「爾の時に弥勒菩薩、是の念を作さく……」（『妙法華』二頁中、二四行目）以下を指す。

7 ここでは「示現大衆欲聞現前成就」とあるが、これに先立ち、七種の功徳の成就を列挙する箇所（一頁中、四行目）にては、「大衆現前欲聞法成就」とあり、現代語訳は後者に基づいた。

8 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、二五行目）に、ほぼそのままの形で存在する。

9 勒那摩提訳では、「有二種義。是故仰推文殊師利」を「有二種法故推文殊師利」とする。

10 勒那摩提訳では、「何等為二」を欠く。

11 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。

12 勒那摩提訳では、「唯自内心」を「自心」とする。

13 勒那摩提訳では、「諸」の字を欠く。

14 勒那摩提訳では、「応当善知」を「応知」とする。

15 勒那摩提訳では、「此」の字を欠く。

16 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。

17 勒那摩提訳では、「成就」を欠く。

18 勒那摩提訳では、「故」の字を欠く。

19 吉蔵は、「『諸の因縁を離る』とは、文殊の、推度、比類するに非ずして、而も知るを以て［の故なり］。成論に云う。『現見事中に因縁は無用なり』と。」という（『大正蔵』第四〇巻、七九六頁下、一一行目）。

20 吉蔵は、文殊師利が「『必ず此の希有の相を見るべき』（『妙法華』『大正蔵』第九巻、二頁中、二九行目）が故に、今将に種種の瑞相を示現せん。此れ文殊の過去に曾て見たる種種の瑞相より出るなり」という（『大正蔵』第四〇巻、七九六頁下、一七行目）。『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁下、五～六行目）に、「以何因縁而有比端神通之相」とある。梵本には、ko nv-atra mañjuśrīḥ hetuḥ kaḥ pratyayo yad ayam evaṃrūpa āścarya-adbhuto とある。(KN. p. 8, *ll.* 5-6)

21 吉蔵は、「彼彼事とは、過去の諸仏の種種なる瑞相の為す所の事なり」という（『大正蔵』第四〇巻、七九六頁下、一九行目）。ここは弥勒らが文殊を選んだ理由について説かれる箇所である。「彼彼事」の具体的な点については、次の「此れ自り以下、次に聖者（文殊師利）を明かす」段に示される。

これは有為の四相、すなわち生（＝現）、住、異（＝没）、滅。

吉蔵は、「因の中に二因有り。一は正因、二は縁因なり。正因とは謂く一切智なり。因なる一切智を以て能く過去世の事を見るが故なり」という（『大正蔵』第四〇巻、七九七頁上、六行目）。吉蔵は一切智の完成を正因、つまり直接的因とみている。

吉蔵は衆相を、「地動き、華雨り、光放つを名づけて衆相と為す」という（『大正蔵』第四〇巻、七九七頁上、九行目）。過去仏、あるいは現在の仏が、法華経を説く際にみられるさまざまな前兆の総称である。このように吉蔵にしたがえば衆相は三となるが、法雲、智顗に依れば、此土六瑞・他土六瑞という相になろう。

勒那摩提訳では、「異異」を欠く。

勒那摩提訳では、「為此」を欠く。

勒那摩提訳では、「異異」を欠く。

勒那摩提訳では、「謂」の字を欠く。

勒那摩提訳では、「住処」の後に「故」を加える。

勒那摩提訳では、「次第」を欠く。

勒那摩提訳では、「彼」の字を欠く。

勒那摩提訳では、「諸」を「一切」とする。

この句を『妙法華』の該当位置に直接見いだすことはできない。吉蔵は「即ち『一万八千仏土』（『妙法華』『大正蔵』第九巻、二頁下、六行目「万八千土」）を釈す」という（『大正蔵』第四〇巻、七九七頁上、二一行目）。梵本には、aṣṭādaśabuddhakṣetrasahasrāṇi vicitrāṇi darśanīyāni とある。（KN. p. 8, *l.* 6）

吉蔵は「経中の『悉く彼の仏国界の荘厳なるを見る』（『妙法華』『大正蔵』第九巻、二頁下、七行目）を釈する文なり」という（『大正蔵』第四〇巻、七九七頁上、二七行目）。梵本には、paramadarśanīyāni とある。（KN. p. 8, *ll.* 6-7）

『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、一七行目～二頁下、七行目）に、ほぼそのままの形で存在する。

吉蔵は偈文「又覩諸仏　聖主師子」（『妙法華』『大正蔵』第九巻、二頁下、一八行目）を釈したものとする（『大正蔵』第四〇巻、七九七頁中、七行目）。梵本には、tathāgatapūrvagamāni tathāgataparināyakāni とある。（KN. p. 8, *l.* 7）

37 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、二頁中、一七行目～二頁下、七行目）に、そのままの形で存在する

七　文殊師利答成就

総説

【テキスト】(p. 3c, *ll.* 17-23)（勒 p. 13b, *ll.* 6-11)

自此以下次[1]明聖者。文殊師利[2]以宿命智現見過去因相果相成就十事[3][4]如現在前。是故能答弥勒菩薩[5]。云何現見過去因相。謂文殊師利自見己身。曽於彼彼諸国土中処処。修行種種行事故[6]。云何[7]現見過去果相。謂[8]文殊師利自見己身。是過去世[9]妙光菩薩於彼仏所聞此法門。為衆生説故。

【書き下し文】

此れ自り以下、次に聖者を明す[10]。文殊師利の、宿命智を以て過去の因相・果相と成就せる十事とを現に見ること現在前の如し[11]。是の故に、能く弥勒菩薩に答う。

云何が過去の因相を現に見るや。謂く、文殊師利は、自ら己の身を見るに、曽て彼彼の諸国土中の処処に於いて種種の行事を修行せるが故なり。

云何が過去の果相を現に見るや。謂く、文殊師利は、自ら己の身を見るに、是れ過去世の妙光菩薩[12]にして、彼の仏所に於いて此の法門を聞きて、衆生の為に説くが故なり。

【現代語訳】

これより以下に、聖者（文殊師利）について明らかにする。文殊師利は、前世についての知識（宿命智）によって、

過去の原因のあり方と結果のあり方、および十の事柄の完成とを実際目前にあるかのように見るのである。この理由で彌勒菩薩［の問い］に答えることができる。

「なぜ、［文殊師利は］過去の原因のあり方を現に見ることができるのか」というと、文殊師利が、自分自身を観察すると、かつて、かれこれ諸々の仏国土の中の場所場所で、種々の修行を行ってきたからである。

「なぜ、［文殊師利は］過去の結果のあり方を現に見ることができるのか」というと、文殊師利が、自分自身を観察すると、［自分が］過去世に妙光菩薩として、かの仏がおいでになるところで、この法門（法華経）を聴いて、衆生のために説いていたからである。

---

1 勒那摩提訳では、「次」の字を欠く。
2 勒那摩提訳では、「菩薩」を加える。
3 勒那摩提訳では、「相」の字を欠く。
4 勒那摩提訳では、「十種事」とする。
5 勒那摩提訳では、「菩薩」を欠く。
6 勒那摩提訳では、「云何現見過去因相。謂文殊師利自見己身。曾於彼彼諸国土中処処。修行種種行事故」を、「現見過去因相者。自見己身。於彼諸仏国土中修行種行事故」とする。
7 勒那摩提訳では、「云何」を欠く。
8 勒那摩提訳では、「謂」を「者」とする。
9 勒那摩提訳では、「世」の字を欠く。
10 本論の「七種功徳成就」（『大正蔵』第二六巻、一頁上、二九行目など）のうちの七番目である「文珠師利菩薩答成就」についての説

明である。

11 国訳は「文殊師利菩薩宿命智を以て現に過去の因の相果の相を見て、十種の事を成就す。現に前に在るが如し」と訓ずる（十九頁）が、ここでは現見の目的語として（一）過去の因相、（二）果相、（三）十事成就とする。なお、吉蔵も「現見已下出所見之事。……一過去因相。二果相。三成就十種事」と解している（『大正蔵』第四十巻、七九七頁中）。

12 過去世での妙光菩薩としての文殊師利については『妙法華』（『大正蔵』第九巻、四頁中、十五行目以下）に記述がある。

成就十事　〇　（分段）

【テキスト】（p. 3c, *l.* 23-p. 4a, *l.* 1）

（勒 p. 13b, *ll.* 11-19）

何等名為成就十事[13]。一者現見大義因成就。二者現見世間文字章句意甚深因[14]成就。三者現見希有因成就。四者現見勝妙因成就。五者現見受用大因成就。六者現見摂取一切諸仏転法輪[15]因成就。七者現見善堅実如来法輪因成就。八者現見能進入因成就。九者現見憶念因成就。十者現見自身所経事因成就。

【書き下し文】

何等を名づけて「成就十事」と為すや。

一には、現見大義因成就なり。

二には、現見世間文字章句意甚深因成就なり。

三には、現見希有因成就なり。

四には、現見勝妙因成就なり。

五には、現見受用大因成就なり。

六には、現見摂取一切諸仏転法輪因成就なり。

七には、現見善堅実如来法輪因成就なり。

八には、現見能進入因成就なり。

九には、現見憶念因成就なり。
十には、現見自身所経事因成就なり。

【現代語訳】

どのようなものを「成就十事」というのか。

第一に、重大な意義をもつものの因が完成していることを現に見ることである。

第二に、世俗的な文字や章句の意味がとても深いことの因が完成していることを現に見ることである。

第三に、希有なることの因が完成していることを現に見ることである。

第四に、非常に素晴らしいものの因が完成していることを現に見ることである。

第五に、［教えを］享受するという大きな因が完成していることを現に見ることである。

第六に、［これから説かれる法華経が］一切諸仏の説法を摂め取っていることの因が完成していることを現に見ることである。

第七に、［衆生の心の中で］如来の説法を確固たるものにすることの因が完成していることを現に見ることである。

第八に、［大いなるさとりに］進み入り得ることの因が完成していることを現に見ることである。

第九に、［教えを］心に保ち続けることの因が完成していることを現に見ることである。

第十に、自らの経てきた事柄の因が完成していることを現に見ることである。

13 勒那摩提訳では、「何等名為成就十事」を「成就十種事者。何等為十」とする。
14 勒那摩提訳では、「意甚深因」を「甚深意因」とする。
15 勒那摩提訳では、「転」の字を欠く。

成就十事　一　現見大義因成就

【テキスト】(p. 4a, *ll.* 2-17)(勒 p. 13b, *l.* 19, p. 13c, *l.* 2)

大義因成就者。八句示現。此義応知[16]。何等為八[17]。一者欲論大法[18]。二者欲雨大法雨。三者欲撃大法鼓。四者欲建大法幢。五者欲然大法灯。六者欲吹大法螺。七者欲不断大法鼓。八者欲説大法。此八句欲示現如来欲論[20]大法等故。何等名[21]為八種大義。謂有疑者為断疑[22]故。已断疑者。増長淳熟彼[23]智身故。根淳熟[24]者。為説二種微密[25]境界。一者声聞微密境界[26]。二者菩薩微密境界[28]。大法鼓者二句示現[30]。以遠聞故。入密境界者。令彼進取[31]上上清浄義故。進取[32]上上清浄義者。

【書き下し文】

「大義因成就[35]」とは、八句もて示現す。此の義、応に知るべし。何等をか八と為す。一には、大法を論ぜんと欲す[36]。二には、大法の雨を雨らさんと欲す。三には、大法の鼓を撃たんと欲す。四には、大法の幢[37]を建てんと欲す。五には、大法の灯を然さんと欲す。六には、大法の螺[38]を吹かんと欲す。七には、大法の鼓を断えざらしめんと欲す。八には、大法を説かんと欲す。

令彼進取一切種智得現。見故。令彼進[34]取一切種智得現見者。為一切法建立名字章句義故。建立名字章句義者。令入不可説証智転法輪故。

此の八句[39]、如来の大法を論ぜんと欲する等を示現せんと欲するが故なり。[40]

何等をか名づけて八種の大義[41]となす。謂く、疑有る者には為に疑を断ずるが故なり。[42]已に疑を断ぜる者には、彼の智身を増長し、淳熟せしむるが故なり。[43]根の淳熟せる者には、為に二種の微密の境界を説く。一には、声聞微密境界、[44]二には、菩薩微密境界[45]なり。大法鼓[46]は二句に示現す。遠きより聞くを以ての故なり。密境界に入りたる者には、彼をして上上清浄なる義を進取せしむるが故なり。[47]上上清浄なる義を進取せる者には、彼をして一切種智を進取して現見を得しむるが故なり。[48]彼をして一切種智を進取して現見を得しめられたる者は、一切法の為に名字章句の義を建立するが故なり。[49]名字章句の義を建立せる者には、不可説なる証智に入りて法輪を転ぜしむるが故なり。[50]

【現代語訳】

第一の「重大な意義をもつものの因が成就すること」とは、八句によって示されているのである。この意義を知らなければならない。何を八としているのか。

第一に、大いなる教えを論じようとしておられること。

第二に、大いなる教えの雨を降らせようとしておられること。
第三に、大いなる教えの太鼓を打ち鳴らそうとしておられること。
第四に、大いなる教えの旗を高く掲げようとしておられること。
第五に、大いなる教えの灯明を燃え上がらせようとしておられること。
第六に、大いなる教えの法螺貝を吹き鳴らそうとしておられること。
第七に、大いなる教えの太鼓の音を断やさぬようにしようとしておられること。
第八に、大いなる教えを説こうとしておられることである。

以上の八句は、如来が大いなる教えを論じようとしていること等を示現されようとしたことによる。

何を［前の八句に対応する］八種の重大な意義と称すべきであろうか。それは以下のごとくである。

［八句が挙げられているのは、如来が］疑い有る者のために、疑いを断ずるからである。

すでに疑いを断じた者には、彼の智慧のあつまりを発展させ、熟させるからである。

機根の熟した者には、二種の深遠なる境地を説くからである。［その二種とは］第一に声聞の微妙なる境地、第二に菩薩の微妙なる境地である。「大法鼓」という言葉は、二句に現れている。遠くから聞こえるから［「鼓」というの］である。

微妙なる境地に入った者には、最上で浄らかな道理を獲得させるからである。

最上で浄らかな道理を獲得した者には、あらゆる事柄を知る智を獲得させ、現にみることができるようにするのである。

あらゆる事柄を知る智を獲得し、現に見ることができるようになった者には、すべての教えのために名称や語句の意味を確立するからである。

名称や語句の意味を確立した者には、言葉で説くことのできない証智に入らせ、[そして]正しい教えを説かせるからである。

16 勒那摩提訳では、「此義」を欠く。
17 勒那摩提訳では、「何等為八」を欠く。
18 勒那摩提訳では、「論大法」を「転大法輪」とする。
19 勒那摩提訳では、「欲」の字を欠く。
20 勒那摩提訳では、「論」を「説」とする。
21 勒那摩提訳では、「名」の字を欠く。
22 勒那摩提訳では、「為」の字を欠く。
23 勒那摩提訳では、「彼」の字を欠く。
24 勒那摩提訳では、「淳」の字を欠く。
25 勒那摩提訳では、「微」の字を欠く。
26 勒那摩提訳では、「一者」を欠く。
27 勒那摩提訳では、「微」の字を欠く。
28 勒那摩提訳では、「二者」を欠く。
29 勒那摩提訳では、「微」の字を欠く。
30 勒那摩提訳では、「者」の字を欠く。

31 勒那摩提訳では、「彼」の字を欠く。
32 勒那摩提訳では、「進」の字を欠く。
33 勒那摩提訳では、「令彼」を欠く。
34 勒那摩提訳では、「令彼進」を欠く。
35 前出の「現見大義因成就」の略。
36 勒那摩提訳には、「一者欲転大法輪」とある。(『大正蔵』第二六巻、十三頁中)
37 「幢」 旗の一種。もとは王や将軍の儀衛や軍旗のことであるが、魔軍に対する法の王の象徴として、仏・菩薩の飾りを意味するようになった。
38 「螺」 ほらがい。「螺」に同じ。
39 『妙法華』で、この八句に対応する部分は次の通り。「今仏世尊。欲説大法。雨大法雨。吹大法螺。撃大法鼓。演大法義。」(『大正蔵』第九巻、三頁下)なお、梵本では、mahādharmaśravaṇasaṃkathyam idaṃ kulaputrās tathāgatasya kartum abhiprāyo mahādharmavṛṣṭyabhipravarṣaṇaṃ ca mahādharmadundubhisaṃpravādanaṃ ca mahādharmadhvajasamucchrayaṇaṃ ca mahādharmolkāsaṃprajvālanaṃ ca mahādharmaśaṅkhābhipraprūraṇaṃ ca mahādharmabheriparāhaṇaṃ ca / mahādharmanirdeśaṃ cādya kulaputrās tathāgatasya kartum abhiprāyaḥ / (KN. p. 16, *l.* 10-p. 17, *l.* 1) とあって、法華論の八句とほぼ対応する。勒那摩提訳には、「此八句示現如来欲説大法等故」とあって、欲の一字を欠く。(『大正蔵』第二六巻、十三頁中)
40 吉蔵は以下の「大義」を前出の八句それぞれに対応させて解釈する。即ち、第一句「欲論大法」に対しては「謂有疑者為断疑故」、以下順次に対応するが、第三句「欲撃大法鼓」と第七句「欲不断大法鼓」については「根淳熟者～以遠聞故」が対応する。
41 八句のうちの第一「大法を論ぜんと欲す」に対応。
42 八句のうちの第二「大法の雨を雨らさんと欲す」に対応。
43 八句のうちの第三「大法の鼓を撃たんと欲す」に対応。
44 八句のうちの第三「大法の鼓を撃たんと欲す」に対応。
45 八句のうちの第七「大法の鼓を断えざらしめんと欲す」に対応。
46 「欲撃大法鼓」と「欲不断大法鼓」。妙法華では「欲……撃大法鼓」(『大正蔵』第九巻、三頁下、十三行目)のみ見られる。梵本では、「鼓」に該当する言葉は、dundubhi「太鼓」(岩本訳)、bherī(「鐃はち」(同)(KN. p. 16, *l.* 11) となっていて別語である。

47 八句のうちの第四「大法の幢を建てんと欲す」に対応。
48 八句のうちの第五「大法の灯を然さんと欲す」に対応。
49 八句のうちの第六「大法の螺を吹かんと欲す」に対応。
50 八句のうちの第八「大法を説かんと欲す」に対応。

成就十事　二　現見世間名字章句意甚深因成就

【テキスト】(p. 4a, *ll.* 18-20)（勒 p. 13c, *ll.* 2-4)

現見世間名字章句意甚深因成就者[51]。如経我於過去諸仏曽見此瑞次第[52]乃至故現斯瑞故。

【書き下し文】

「現見世間名字[53]章句意甚深因成就」とは、経の如く[54]「我、過去の諸仏において、曽て、この瑞を見たてまつりしに」次第して乃至「故にこの瑞を現したもうならん」が故なり。

【現代語訳】

「世間における名称や語句の意味がはなはだ深いということの因が完成すること成就することを現に見る」というのは、『[法華]経』において「わたしは、過去の多くの仏たちについて、このようなめでたいしるしを見させていただいた」から「だから、このようなめでたいしるしを現し示されるのだ。」とまでにあるように。

51 勒那摩提訳では、「者」を「故」とする。
52 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。

53 初出の箇所では（三頁下、二五行目）これを「文字」とする。勒那摩提訳も同様である。

54 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、三頁下、一四～一七行目）にそのままの形で存在する。

成就十事　三　現見希有因成就

【テキスト】(p. 3a, *ll.* 21-28)（勒 p. 13c, *ll.* 4-11)

現見希有因成就者。以[55]無量時不可得故。不可思議不可称不可量者。示現過彼阿僧祇劫不可得故。又[56]復示現五種劫故。所謂[57]一夜二昼三月四時五年。[58]示現無量無辺諸法故。[59]如経如過去無量無辺不可思議阿僧祇劫爾時有仏号日月灯明次第[60]乃至令[61]得阿耨多羅三藐三菩提成一切種智故。

【書き下し文】

「現見希有因成就」とは、無量の時、不可得なるを以ての故なり。「不可思議、不可称、不可量[62]」とは、かの阿僧祇劫を過ぎて、不可得なるを示現するが故なり。又復た、五種の劫[63]を示現するが故なり。所謂、一には夜。二には昼。三には月。四には時。五には年なり。無量・無辺の諸劫[64]を示現するが故に。経の如く[65]「過去の無量・無辺・不可思議なる阿僧祇劫の如き、そのときに仏あり。日月灯明と名づけたてまつる」次第して乃至「阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切種智を成ぜしめたもう」が故なり。

【現代語訳】

「希有なることの因が完成することを現に見る」というのは、はかりしれないほどの長い時はとらえることができない、ということである。「心で考えることもできず、ことばでいいあらわすこともできず、はかることもできない」と

いうのは、阿僧祇の時を過ぎて、とらえることができない、ということを現し示すからである。また、五種類の劫の単位を現し示す。いわゆる、一には「夜」、二には「昼」、三には「月」、四には「時節」、五には「年」である。はかり知ることのできないほどの多くの劫を現し示すからである。『[法華]経』において「はかりしれず、無辺際の、考えることもできない、阿僧祇劫の昔に、おりしも、日月灯明という名の如来が現れて」から「無上の正しいさとりを得て、仏の知恵を完成させた」とまでにあるように。

55 勒那摩提訳では、「以」の字を欠く。
56 勒那摩提訳では、「又」の字を欠く。
57 勒那摩提訳では、「故。所謂」を欠く。
58 勒那摩提訳では、「一者夜二者昼三者月四者時五者年」とする。
59 勒那摩提訳では、「示現彼無量無辺劫故」とする。
60 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。
61 勒那摩提訳では、「令」の字を欠く。
62 『妙法華』(『大正蔵』第九巻、三頁下、一七行目〜二六行目)に、そのままの形で存在する。梵本には、acintyair aparimitair apramāṇais とある。(KN. p. 17, l. 8)
63 「劫」とは極めて長い時間をあらわす単位でサンスクリット語 kalpa の音写「劫波」の略形。以下に「夜」「昼」「月」「時」「年」の五種の時節を挙げるが、「劫」には、このような時分・時節の意味はない。この点について吉蔵は「昼夜等云何亦名劫。答。外国称劫波。」(『大正蔵』第四〇巻、七九八頁下、二三行目)という解釈を示す。
64 底本は「法」。ただ、意味上から考えて、大正蔵の他の伝本の表記を採って「劫」と改める。
65 『妙法華』(『大正蔵』第九巻、三頁下、一七〜二六行目)

成就十事　四　現見勝妙因成就

【テキスト】(p. 4a, *l.* 29-p. 4b, *l.* 2)(勒 p. 13c, *ll.* 11-13)

現見勝妙因成就者。示現諸仏及諸菩薩自受用故。[66]如経次復有仏亦名日月灯明次第[67]乃至所可説法初中後善故。

【書き下し文】

「現見勝妙[68]因成就」とは、諸仏及び諸菩薩の自受用を示現するが故なり。経の如く[69]「次に復た仏有り、亦た日月灯明と名づく」次第して乃至「説く可き所の法は初も中も後も善なる」が故なり。

【現代語訳】

「非常に素晴らしいもの（仏がこれから説こうとしている『法華経』の七つの善い点）の因が完成していることを現に見る」というのは、諸々の仏や諸々の菩薩が［『法華経』の七つの善い点］みずからのものとして受け継いでいる（自受用）と［経自身が］示しているからである。『［法華］経』において「次にまた、日月灯明という名の仏がおられた」から「お説きになられる法は初めも中間も終わりもすべて優れていた」とまでにあるように。

---

66 勒那摩提訳では、「示現諸仏及諸菩薩自受用故」を「以諸仏菩薩自受用示現故」とする。

67 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。

68 「勝妙」の意味について、吉蔵は「二万億の仏の説法がみな七善の文であること」と解している（『大正蔵』第四十巻、七九九頁上）。その際の七善とは、『法華経』序品の（一）初善・中善・後善、（二）其義深遠、（三）其語巧妙、（四）純一無雑、（五）具足、（六）清白、（七）梵行之相のこと（『大正蔵』第九巻、三頁下）。

69 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、三頁下、二六行目～四頁上、一行目）にそのままの形で存在する。

成就十事　五　現見受用大因成就

【テキスト】(p. 4b, *ll.* 3-6)(勒 p. 13c, *ll.* 14-17)

現見受用大因成就者。是時王子受勝妙楽各捨出家。復彼大衆於爾許時心不疲倦[70]故。如経其最後仏未出家時次第[71]乃至仏授記已便於中夜入無余涅槃故。

【書き下し文】

「現見受用大因成就」とは、是の時、王子勝妙なる楽を受けんとし、各捨てて出家せり、復た彼の大衆は爾許の時に於いて心疲倦せざるが故なり。経の如く[72]「其の最後の仏、未だ出家せざりし時」次第して乃至「仏は授記し已り、便ち中夜に於いて無余涅槃に入る」が故なり。

【現代語訳】

「[教えを聴くことによって生ずる]大いなる[楽]を享受することの因が完成していることを現に見る」というのは、その時[日月灯明仏の八人の]王子たちが極めて優れた楽を享受しようと、それぞれ[王位や領土を]捨てて出家したこと、また[日月灯明仏を取り囲んでいる]大勢の人々が[日月灯明仏が『法華経』を説かれている六十小劫もの]間中ずっと、倦み疲れる心を起こさなかったからである。[なぜなら]『[法華]経』において「その最後の仏がまだ出家しておられなかった時」から「仏は[徳蔵菩薩に]成仏の予言をしてから、その夜更けに心身とも滅した究極の涅槃に入られた」とまでにあるように。

70 勒那摩提訳では、「心不疲倦」を「不生疲倦心」とする。

71 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。

72 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、四頁上、二行目～四頁中、六行目）にそのままの形で存在する。この引用部分の中に、八王子の出家や法華経を聴聞する大衆の様子について説かれている。

成就十事　六　現見摂取一切諸仏転法輪因成就

【テキスト】(p. 4b, *ll.* 7-9)（勒 p. 13c, *l.* 17-p. 14a, *l.* 2)　【書き下し文】

現見摂取一切諸仏転法輪因成就者。法輪不断故。如経仏滅度後妙光菩薩持妙法蓮華経満八十小劫為人演説故。

「現見摂取一切諸仏転法輪因成就」とは、法輪断ぜざるが故なり。経の如く[73]「仏の滅度の後に、妙光菩薩は妙法蓮華経を持し、八十小劫を満てて、人の為に演説せる」が故なり。

【現代語訳】

「［これから説かれる『法華経』が、］一切諸仏の説法を摂め取っていることの因が成就していることを現に見る」とは、［諸々の仏によって説かれた］法輪が断絶していないからである。『［法華］経』において「仏が滅度された後に、妙光菩薩は妙法蓮華経を受持して、八十小劫もの間、人々のために［法華経を］説き続けた」とあるように。

73 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、四頁中、六～七行目）にそのままの形で存在する。

成就十事　七　現見善堅実如来法輪因成就

【テキスト】（p. 4b, *ll.* 10-13）（勒 p. 14a, *ll.* 2-5）

現見善堅[74]実如来法輪因成就者。仏滅度後無量時説[75]故。如経日月灯明仏八子皆師妙光次第[76]乃至皆令[77]堅固阿耨多羅三藐三菩提心[78]故。

【書き下し文】

「現見善堅実如来法輪因成就」とは、仏の滅度の後、無量の時に説くが故なり。経の如く[79]「日月灯明仏の八子、皆妙光を師とし」次第して乃至「皆をして阿耨多羅三藐三菩提心に堅固ならしむる」が故なり。

【現代語訳】

「如来の説法を［衆生の心の中で］確固たるものにすることの因が完成していることを現に見る」とは、仏が滅した後、量ることもできない長時にわたって［妙光菩薩が］説法しているからである。『［法華］経』において「この王子たちは皆、妙光菩薩を師とし」から「［八王子たち］皆に、無上の正しいさとりの心を固めさせる」とまでにあるように。

74　勒那摩提訳では、「善」の字を欠く。
75　勒那摩提訳では、「説」の後に「法」の字を加える。

76 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。
77 勒那摩提訳では、「令」の後に「其」の字を加える。
78 勒那摩提訳では、「心」の字を欠く。
79 『妙法華』には「日月灯明仏八子。皆師妙光。令其堅固阿耨多羅三藐三菩提。」(『大正蔵』第九巻、四頁中、七～九行目)とあるが、論の引く経文と少しく異なる。論では「皆令堅固」とあるが、『妙法華』では「令其堅固」とする。また論では「阿耨多羅三藐三菩提心」とあるが、『妙法華』では「心」の一字なし。但し、勒那摩提訳は「三藐三菩提」とあって、『妙法華』と一致する。

成就十事　八　現見能進入因成就

【テキスト】(p. 4b, *ll.* 14-15)(勒 p. 14a, *ll.* 5-7)

現見能[80]進入因成就者。彼諸王子得大菩提故。如経諸王子次第[81]乃至皆成仏道故。

【書き下し文】

「現見能進入因成就」とは、彼の諸の王子、大菩提を得るが故なり。経の如く[82]「是の諸の王子」次第して乃至「皆、仏道を成ぜる」が故なり。

【現代語訳】

「[大いなるさとりに]進み入り得ることの因が成就することを現に見る」というのは、かの王子たちが大いなるさとりを得るからである。『[法華]経』において「この王子たちは」から「皆、仏道において完成した」とまでにあるように。

80 勒那摩提訳では、「能」の字を欠く。
81 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。
82 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、四頁中、九～十行目）にそのままの形で存在する。

成就十事　九　現見臆念因成就

【テキスト】（p. 4b, *ll.* 16-18）（勒 p. 14a, *ll.* 7-9）

現見憶念因成就者。為他説法利益他故。如経其最後成仏者名曰然灯次第[83]乃至尊重讃歎故。

【書き下し文】

「現見臆念因成就」とは、他の為に説法して他を利益するが故なり。経の如く[84]「其の最後に成仏せる者を名づけて然灯と曰い」次第して乃至「尊重し讃歎せる」が故なり。

【現代語訳】

「［教えを］心に保ち続けることの因が完成することを現に見る」というのは、［教えを心に保ち続けることのできる人だけが］他人のために説法して他人に利益をもたらすからである。『［法華］経』において「最後に成仏した者を名づけて然灯［仏］といい」から「尊び、讃えた」とまでにあるように。

83 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。
84 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、四頁中、十～一五行目）にそのままの形で存在する。

成就十事　十　現見自身所経事因成就

【テキスト】(p. 4b, *ll.* 19-26)(勒 p. 14a, *ll.* 9-12)

現見自身所経事因成就者。以自身受勝妙楽故。如経弥勒当知次第[85]乃至仏所護念故。汝号求名者。示現知彼[86]過去事故。又[87]復示現今得[88]彼法皆[89]具足故。又依義摂三故一与説故。如経今仏世尊欲説大法等故。二成如実説故。如経我於過去曽見等故。三令待説故。如経諸人今当知等故[90]自此已下示現所説法因果相応知[91]。

【書き下し文】

「現見自身所経事因成就」とは、自身の勝妙なる楽を受くるを以ての故なり。経の如く[92]「弥勒よ、当に知るべし」次第して乃至「仏の護念する所」の故に。「汝を求名と号づく」[93]とは、彼の過去事を知るを示現するが故なり。又復た、今、彼の法を得、皆具足するを示現するが故なり。

又、義に依りて、三を摂するが故なり。一には、説に与るが故に。経の如く[94]「今、仏世尊は、大なる法を説かんと欲す」等の故なり。二には、如実の説を成すが故に。経の如く[95]「我は、過去に於いて曽て見る」等の故なり。三には、説くを待たしむるが故なり。経の如く[96]「諸人よ、今、当に知るべし」等の故なり。此れ自り已下、説く所の法の因果を示現す。応に知るべし。

【現代語訳】

「自らの経てきた事柄の因が完成していることを現に見る」というのは、[文殊師利]自身が[人々に過去の因縁を語ることができたことによって]きわめて優れた楽を得たからである。『[法華]経』において「弥勒よ。[このこと]

知らなければならない」から「仏に護り念われるもの」とまでにあるように。「汝を求名と名付ける」［と経で言うのは］のは、［文殊師利自身が］その過去の出来事を知っていることを示すからである。また、今、［文殊師利がその時に説かれた］教えを了解し、すべてを備えていることを、示しているからである。

また、意味によって、三つのことが摂められているからである。

第一に、［法を］説くことに与るからである。『［法華］経』において「今、世尊が大いなる法を説くことを欲している」等とあるように。

第二に、ありのままなことを説いているからである。『［法華］経』において「私は、かつて過去に見たのである」等とあるように。

第三に、［仏の］説法を、［文殊師利が諸人に］待たせているからである。『［法華］経』において「諸人よ。今、まさに知るべきである」等とあるように。

ここより以下は、説かれた教えの因果の姿を示している。［このことを］まさに知らなければならない。

85 勒那摩提訳では、「次第」を欠く。
86 勒那摩提訳では、「彼」の字を欠く。
87 勒那摩提訳では、「又」の字を欠く。
88 勒那摩提訳では、「今」の字を欠く。
89 勒那摩提訳では、「皆」の字を欠く。
90 勒那摩提訳では、「又依義摂三故」以下「等故」までを欠く。また、吉蔵の『法華論疏』にも該当部分は見られない。

91 この一文は、勒那摩提訳では序品の終わりではなく、方便品の「論曰」の後に記されている。また、吉蔵もそれに従っている。『法華論疏』（『大正蔵』第四〇巻、八百頁下、十六行目）

92 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、四頁中、十五～十八行目）にそのままの形で存在する。『妙法華』の当該箇所には、「衆経を読誦すと雖も、而も通利せず、忘失する所多し」とされる求名が、後に、「諸の善根を種えたる因縁を以の故に、無量百千万億の諸仏に値することを」得たとある。

93 「汝号求名」は『妙法華』には見あたらないが、前注の「求名菩薩汝身是也」に対応すると考えられる。なお梵本は、tvam evājita sa tena kālena tena samayena yaśaskāmo nāma bodhisattvo 'bhūt sausīdyaprāptaḥ /（KN. p. 22, *ll.* 12-13）

94 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、三頁下、十二行目）にそのままの形で存在する。

95 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、三頁下、十四行目）の「我於過去諸仏曾見此瑞」と対応する。

96 『妙法華』（『大正蔵』第九巻、五頁中、二十行目）にそのままの形で存在する。

附表、梵文『法華経』、『法華論』引用文、羅什訳『妙法華』対照表[1]

一、阿羅漢の叙述

evaṃ mayā śrutam /ekasmin samaye bhagavān rājagṛhe viharati sma gṛdhrakūṭe parvate mahatā bhikṣusaṃghena sārdhaṃ dvādaśabhir bhikṣuśataiḥ

（一）sarvair arhadbhiḥ（一）kṣīṇāsravair（二）niḥkleśair（四）vaśībhūtair（五）suvimuktacittaiḥ（六）suvimuktaprajñair

1 梵文『法華経』は、南條・ケルン本を使用。括弧付きの数字は筆者の補いである。

(七) ājāneyair (八) mahānāgaiḥ (九) kṛtakṛtyaiḥ (十) kṛtakaraṇīyair (十一) apahṛtabhārair (十二) anuprāptasvakārthaiḥ (十三) parikṣīṇabhavasaṃyojanaiḥ (十四) samyagājñāsuvimuktacittaiḥ (十五) sarvacetovaśitā- (十六) -paramapāramitāprāptair (十七) abhijñātair (十八) mahāśrāvakair/(p. 1, *ll*. 5-9)

『法華論』引用文

如是我聞。一時仏住王舎城耆闍崛山中。与大比丘衆万二千人俱。

(一) 皆是阿羅漢。(二) 諸漏已尽 (三) 無復煩悩。(四) 心得自在 (五) 善得心解脱 (六) 善得慧解脱。(七) 心善調伏。(八) 人中大龍。(九) 応作者作。(十) 所作已弁。(十一) 離諸重担。(十二) 逮得己利。(十三) 尽諸有結。(十四) 善得正智心解脱。(十五) 一切心得自在 (十六) 到第一彼岸。

羅什訳『妙法華』

如是我聞。一時仏住王舎城耆闍崛山中。与大比丘衆万二千人俱。

皆是阿羅漢。諸漏已尽。無復煩悩。逮得己利尽諸有結。心得自在。

二′ 菩薩摩訶薩の叙述

āśityā ca bodhisattvasahasraiḥ sārdhaṃ

(一) sarvair avaivartikair ekajātipratibaddhair yad utānuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau (二) dhāraṇīpratilabdhaiḥ

(三) mahāpratibhānapratiṣṭhitaiḥ (四) avaivartyadharmacakrapravartakaiḥ (五) bahubuddhaśatasahasraparyupāsitaiḥ (六) bahubuddhaśatasahasrāvaropitakuśalamūlaiḥ (七) bahubuddhaśatasahasrasaṃstutaiḥ (八) maitrīparibhāvitakāyacittaiḥ (九) tathāgatajñānāvatāraṇakuśalaiḥ (十) mahāprajñaiḥ (十一) prajñāpāramitāgatiṃgataiḥ (十二) bahulokadhātuśatasahasraviśrutaiḥ (十三) bahuprāṇikoṭīnayutasahasrasaṃtārakaiḥ / (p. 2, *ll.* 10-p. 3, *l.* 3)

『法華論』引用文

菩薩摩訶薩八万人。

(一) 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退転。(二) 皆得陀羅尼 (三) 大弁才楽説。(四) 転不退転法輪。(五) 供養無量百千諸仏。(六) 於諸仏所種諸善根。(七) 常為諸仏之所称歎。(八) 以大慈悲而修身心。(九) 善入仏慧 (十) 通達大智 (十一) 到於彼岸。(十二) 名称普聞無量世界。(十三) 能度無数百千衆生

羅什訳『妙法華』

菩薩摩訶薩八万人。

皆於阿耨多羅三藐三菩提不退転。皆得陀羅尼楽説弁才。転不退転法輪。供養無量百千諸仏。於諸仏所殖衆徳本。常為諸仏之所称歎。以慈修身善入仏慧。通達大智到於彼岸。名称普聞無量世界。能度無数百千衆生。